

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
研究開発実施終了報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

研究開発プロジェクト
「多世代哲学対話とプロジェクト学習による
地方創生教育」

研究開発期間 平成 28 年 10 月～平成 29 年 9 月

研究代表者 河野 哲也
(立教大学文学部 教授)

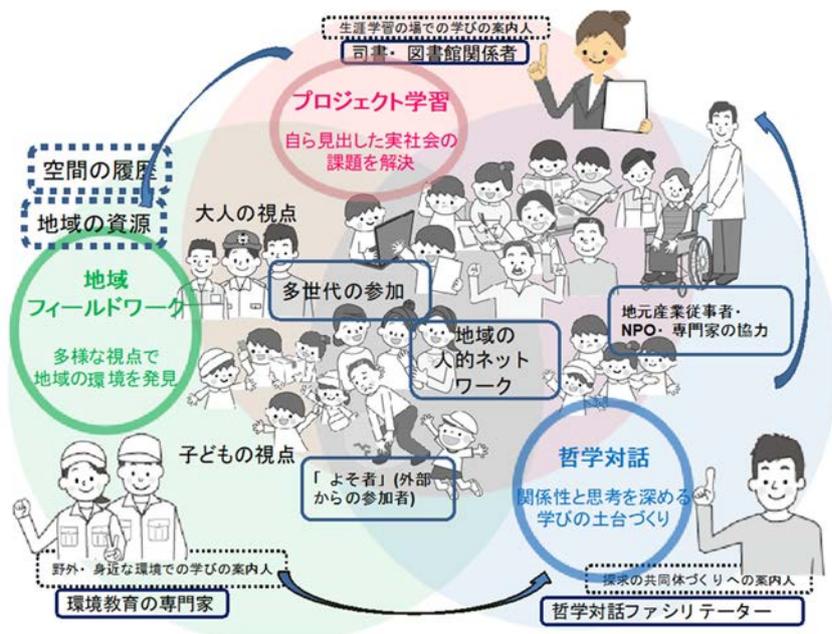
目次

1. プロジェクトの達成目標	2
1-1. 全体目標及びリサーチ・クエスチョン.....	2
1-2. 背景.....	4
1-3. ロジックモデル.....	5
2. 研究開発の実施方法・内容	6
2-1. 研究開発実施体制の構成図.....	6
2-2. 取り組みの概要.....	7
3. 研究開発結果・成果	14
3-1. プロジェクトの目標達成状況及び結論.....	14
3-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョンへの回答.....	14
3-3. 領域のリサーチ・クエスチョンへの回答.....	17
3-4. 実施項目毎の結果・成果の詳細.....	26
3-5. 今後の成果の活用・展開に向けた状況.....	32
4. 研究開発の実施体制	33
4-1. 研究開発実施者.....	33
4-2. 研究開発の協力者・関与者.....	33
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	35
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	35
5-2. 論文発表.....	44
5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	45
5-4. 新聞報道・投稿、受賞など.....	46
5-5. 特許出願.....	46
6. その他（資料：哲学対話の参加者感想）	47

1. プロジェクトの達成目標

1-1. 全体目標及びリサーチ・クエスチョン

<<イメージ>>



<達成目標>

地方の衰退を止め、持続可能であり、かつ持続的に成長する地域を創生するには、人材を育成し、その人材が地域の産業で活躍できるような産業と教育の循環を作り出す必要がある。本提案の目的は、持続可能な地域づくりのための多世代哲学対話とプロジェクト学習を推進し、「地方創生教育」のモデルケースを創出することである。「地方創生教育」は以下の三つの過程が含まれる。

- ① 「地域フィールドワーク」と多世代「哲学対話」による価値の創生：地域住民と児童生徒が、ファシリテーターの導きで、地域の履歴を知るための「地域フィールドワーク」と、地域創生のための「哲学対話」を複数回、行う。
 - ② プランの作成と実行：それぞれの価値とビジョンを実現するための地域創生プロジェクトを画策していく。地域住人、高等教育機関、地方行政、企業、NPOがそのためのリソースを提供し、児童生徒にプロジェクトのプランを作成してもらい、それを実現するためのプロセスを企画し準備する。
 - ③ プランが実行され、子どもの企画が実際に地域において実現していく過程を支援する。「地域創生教育」のモデルケースを以下のような地域で実施し、個々のケースを分析検証しながら、教育プログラムとして成立するように改善を加えていく。
- ・ 東日本大震災被災地域での「地方創生教育」：すでに地域との協力体制の合意ができあがりつつある岩手県陸前高田市と盛岡市、宮城県気仙沼市において、大学、行政、地域の図書館、現地NPO法人、学校、保護者組織と連携しながら、プロセスの②までの過程（「地域フィールドワーク」と「哲学対話」の実現、地域創生プロジェクトの立案）を実行し、「地方創生教育」のモデルケースとして、その進行を検証し、この方法論の確立を目指す。
 - ・ プロトタイプ実施：東京近郊、及び他地域（宮崎、沖縄、広島、仙台）において地域の行政、図書館、学校、NPO、保護者などとの関係を作りながら、上記の過程を実現するためのプロトタイプ（とくに①の過程）を試行し、本格的な実施に向けた準備を行う。

<リサーチ・クエスチョン>

- ・持続可能かつ持続的に成長する地域をつくるために必要な「地方創生教育」はどうあるべきか？
- ・多世代哲学対話とプロジェクト学習を組み合わせた本プロジェクトが採用するモデルケースは、それが子どもたちと地域内外の大人たちが問題解決に向けて共に考え共に学び共に活動する機会としてどのような有効性をもつか？
- ・具体的に、この教育モデルを地域のどのように浸透させるか？
- ・子どもに環境や地域創生の問題に関心を持ってもらうにはどのような方法が有効か？
- ・地域によって異なる政治的なイシューに向き合い、それを解決するにはどうすればよいか？

1-2. 背景

現代社会における地方の課題は、人口減少や産業の流失、社会の多様化とグローバル化の対応の遅れなどを乗り越えて、持続可能であり、かつ持続的な成長と発展を遂げることにある。震災や津波の被災地は、この日本の地方の問題と脆弱性が突出して現れている場所である。地方では、教育もまた深刻な問題を抱えている。都市部との学力格差、学習意欲の低下、コンピテンシー教育など新しい教育への対応の不十分さ、教育の選択肢の少なさ、地域での就職先の減少、若年層の都市部への流出などである。

これらの教育問題の最終的な原因は、地方における産業の衰退にあり、産業の衰退は知的イノベーションを作り出すための社会的・文化的土壌が十分に発展していないことに起因する。また、既存の地域コミュニティが年代や性別などのギャップを埋められずに硬直化しており、世代間のディスコミュニケーションが、若年層の流出に拍車をかけている。他方、初等中等教育機関ではいまだに知識取得を中心とした教育が行われており、OECDが推奨する新しいコンピテンシー教育（技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力）に十分に対応できていない。同時に、今日の社会においてさまざまな活性化をもたらす要因となるはずの多様化やグローバル化も、それらの地域には不十分である。教育が現代社会に見合ったものではないことから、地域の産業に今日求められる能力を十分に培った人材を提供することができず、産業が衰退することから教育へ十分なリソースが届かなくなるという悪循環に陥っている。これは、日本の多くの地方が抱える共通問題である。

地方の衰退を止め、持続可能かつ持続的に成長する地域を創生するには、一時的な町おこしではなく、人材を育成し、その人材が地域の産業で活躍できるような産業と教育の発展的な循環を作り出す必要がある。

本プロジェクトの目的は、初等中等教育と大学・研究機関が連携し、多世代に渡る「哲学対話」と「プロジェクト学習」を推進し、教育の場が子どもたちと地域の内外の人たちが地域課題の解決に向けて共に考え共に学び共に活動する機会となるような「地方創生教育」のモデルケースを創出することである。近年、日本各地で興隆している哲学対話は、全員が同等の資格で参加し、相互の質疑や討論によって物事を根本的なレベルまで掘り下げる哲学の実践である。哲学対話は、深い相互理解と創造的な合意形成を得ることができ、政治ディベートのように対立を生まない。ファシリテーターの導きと質問によって誰もが自分の立場を反省的に問い直し、問題の本質に向き合い、それまでよりも深い次元での議論と解答を求められる活動である。世代間のディスコミュニケーションは、この価値の根本を問い直し合う哲学対話によって克服される。子どもの哲学対話については代表者が作成した以下のビデオ参照のこと。

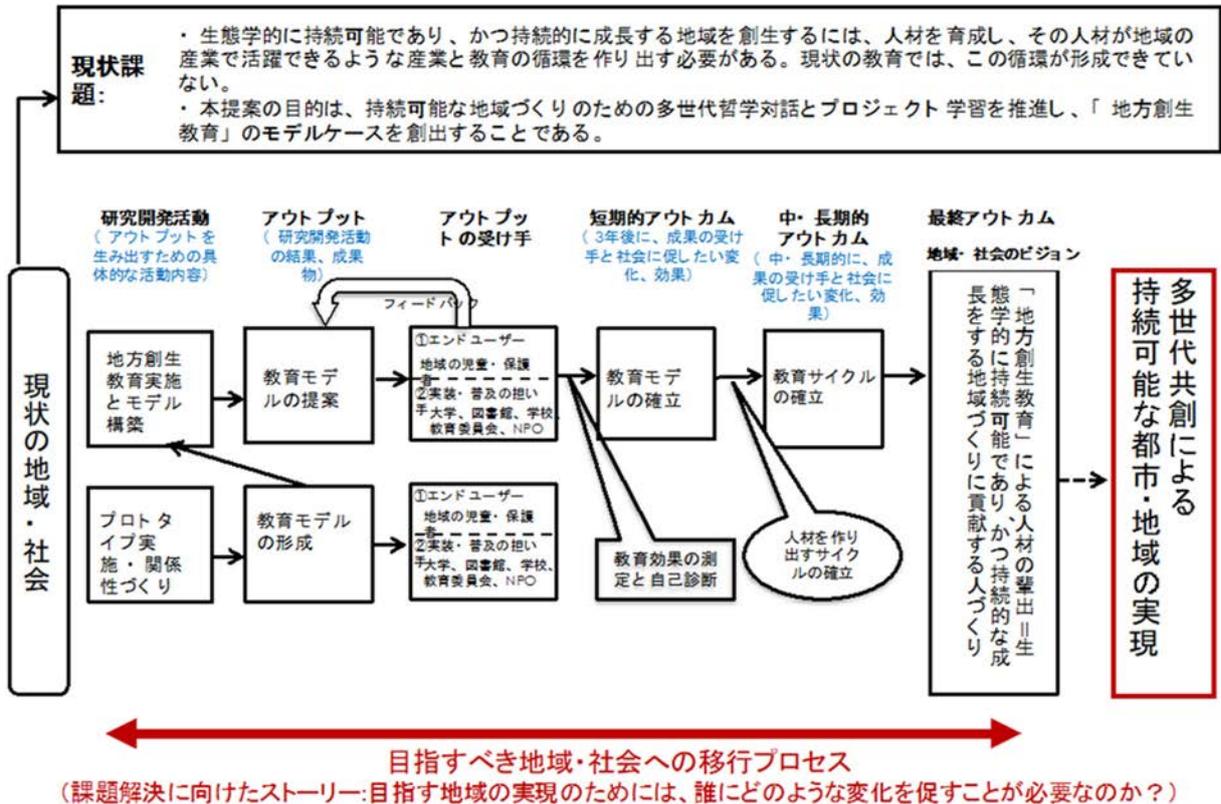
<https://www.youtube.com/watch?v=TiHGrPFwEJ8&feature=youtu.be>

この教育プロジェクトでは、地域の知的イノベーションの拠点、大学や研究所、地方行政、企業、NPO、海外教育機関と連携した初等中等教育機関に設置され、ここから新しい産業が創出される。ここで行われるべき教育は、さまざまな知識や技能を活用して、実際の社会の文脈における課題に取り組む「真性の教育」である。その方法論として特に重視されるべきは、相互理解と価値創出、合意形成のための哲学対話であり、その対話に基づいて特定のプロジェクトを推進させながら、関連する知識や技能を広く学ぶプロジェクト学習である。この教育は、正規の授業だけではなく、課外活動、サマースクールのような保護者・地域住民が参加する活動によっても行われる。

地域を活性化するポイントは、「よその、わかもの、ばかもの」と言われる（桑子、2016）。「よその」や「わかもの」が大切なのは、それまで地域の大人たちが無自覚のうちに前提としてきたことを新鮮な目で捉え返し、当然視されてきた価値や慣習や考え方を全く別の角度から問い直すからである。「ばかもの」とは意外の発想と強い情熱をもって物事を推進する人物のことである。これらの地域の中心を成す層からは外部のあるいは周辺の視点から、その地域の「空間の履歴」（桑子敏雄）を捉え直したときに、その地域を創生するアイデアが生まれる。本プロジェクトが提案するように、以上の創造的な活動を初等中等教育のなかで実施することが、地域を愛し、かつイノベティブな新しいタイプの人材を地域社会に送り出すことになる。この実施は、教育という領域に大きな意味をもち、またそうした人材の創出が、持続可能（環境保護・自然との共生）であり、かつ持続的に成長する地域の創生という本推進事業の目的にも適うことになる。

1-3. ロジックモデル

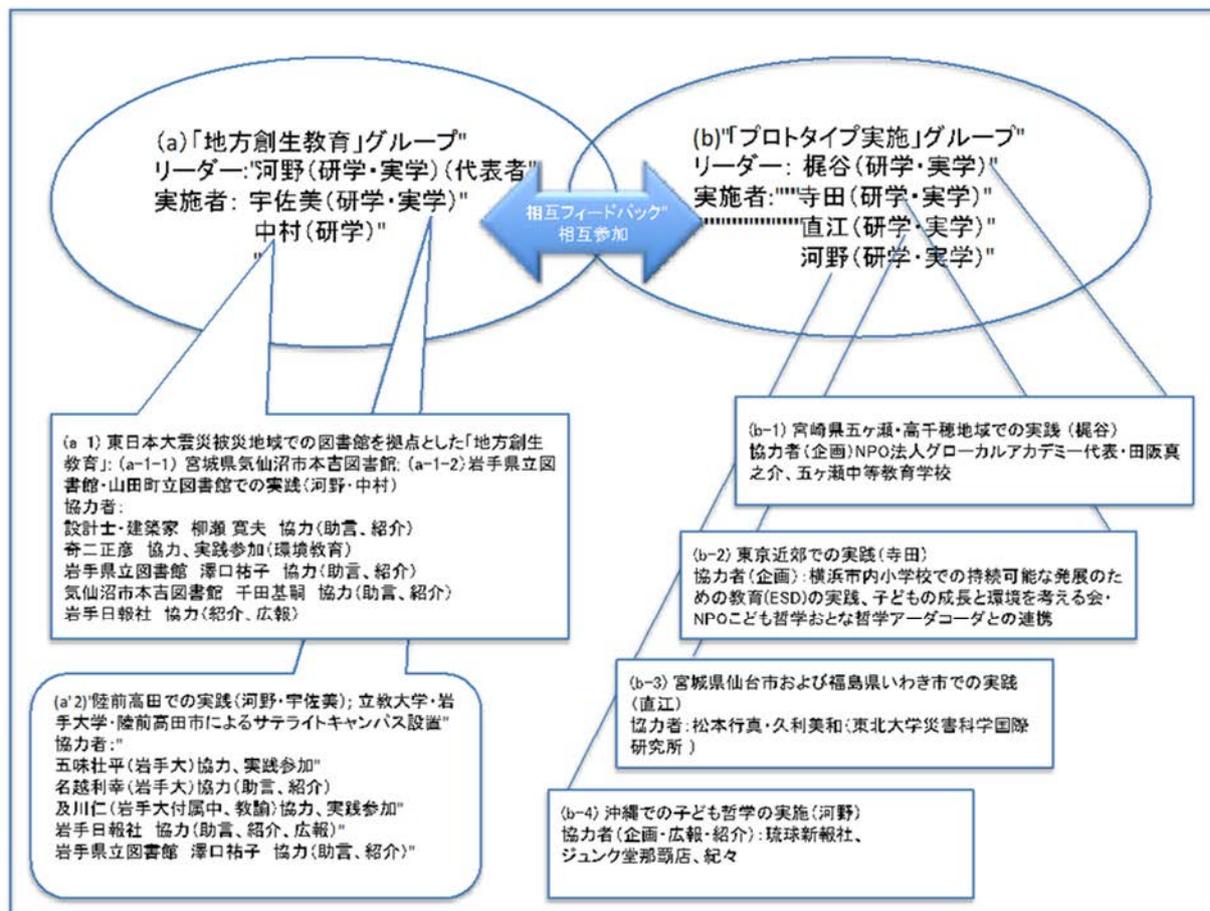
多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育の創出



2. 研究開発の実施方法・内容

2-1. 研究開発実施体制の構成図

<<イメージ>>

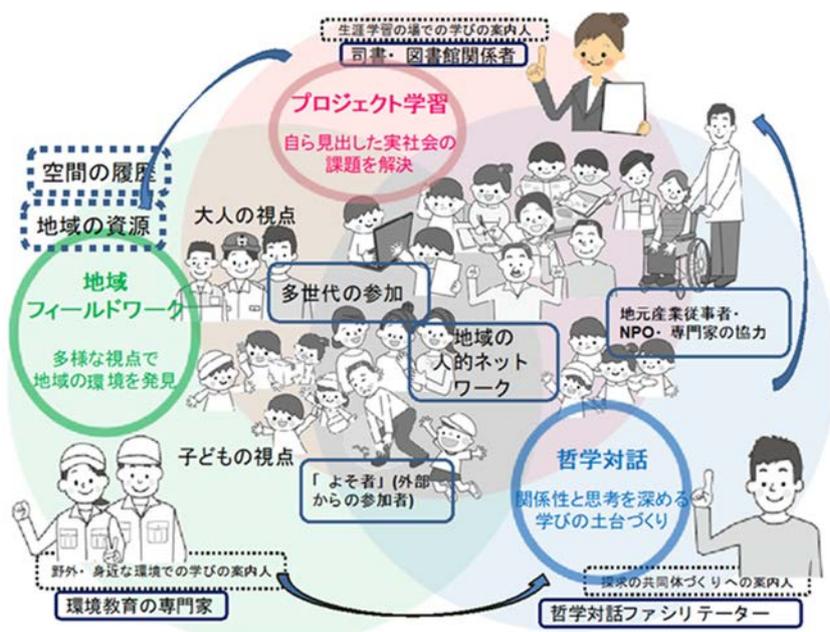


(協力者)

氏名 所属 役職 (または組織名)	協力内容
五味壮平・岩手大学人文社会学部・教授	東北被災地での実践の助言、協力
田阪真之介・NPO 法人グローバルアカデミー	宮崎での実践における紹介、機会提供、実践参加
柳瀬寛夫(株) 岡田新一設計事務所・代表取締役	宮城県気仙沼における実践への助言、紹介
西村高宏・福井大学医学部・教授	仙台・福島での実践における紹介、機会提供、実践参加
小川泰治・早稲田大学教育学研究科・大学院生	広島、東京近郊での実践の協力、実践参加

2-2. 取り組みの概要

<<イメージ>>



【本プロジェクトの全体像】

本プロジェクトの目的は、初等中等教育と大学・研究機関が連携し、多世代に渡る「哲学対話」と「プロジェクト学習」を推進し、教育の場が子どもたちと地域の内外の人たちが地域課題の解決に向けて共に考え共に学び共に活動する機会となるような「地方創生教育」のモデルケースを創出することである。

【方法論】

プロジェクト学習を開発教育に結びつけ、その開発の基本的な方向性とアイデアを哲学対話により生成する。

- ・プロジェクト学習・・・特定のプロジェクトを推進させながら、関連する知識や技能を広く学ぶ学習方法
- ・開発教育・・・いわゆる開発途上国において望ましい、地域に住民が主体となった学びの場を形成するための教育。

「開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育。

- ・哲学対話・・・「探求の共同体 (community of inquiry)」というコミュニティを形成しながら互いの思考を促進し、相互理解をより深める教育方法。

【流れ】

「地方創生教育」のモデルケースの創出には、以下の3つの過程が含まれる。

- 1 「地域フィールドワーク」と「哲学対話」による価値の創生
- 2 プランの作成と実行
- 3 サイクル作り

また、上記の流れを達成するために、具体的に、下記2つの項目を実施する。

- (a) 東日本大震災被災地域での「地方創生教育」
- (b) プロトタイプ実施

2-3. 実施項目・内容

このプロジェクトは、上の(a)(b)という大きく二つのグループで進行する。一つ目の(a)グループは、すでに私たちのグループが協力体制をある程度、約束されている東日本大震災被災地域での「地方創生教育」である。ここでは、上記の2番目までの過程（「地域フィールドワーク」と「哲学対話」の実現、地域創生プロジェクトの立案）を実行し、「地方創生教育」のモデルケースとして確立することを目指す。計画期間内で、「地域フィールドワーク」と「哲学対話」から、地域創生プロジェクトの立案にいたる教育過程を実行し、それを視聴覚的に記録（ビデオ、カメラ、ICレコーダー、パソコンなど）して、子どもなど参加者のインタラクションを分析し、どのようなプロセスの教育が有効であるか、ひとつのモデルパターンを確立する。

二つ目の(b)グループは、それぞれの研究者がこれまでの人的・地域的な関わりを活かしながら、東京近郊、及び他地域（宮崎、沖縄、広島、仙台）で(a)の実践を行えるような地域ネットワークとその場所に適した地域創生プログラムを開発していく。もちろん、(a)での成果が参考になるわけであるが、場所と地域、参加者の性質により、被災地域とは異なったフィールドワークと対話のテーマが必要となることも考えられる。そこで、「地方創生」につながるプロトタイプ的な哲学対話やフィールドワーク教育を行い、最終的に地域創生のためのプロジェクトを立案し、それを実現していくための準備作業を行う。同じく実践を記録（ビデオ・カメラなど）して分析し、教育実践モデルパターンを提示する。

2-3-1. (東日本大震災被災地域での「地方創生教育」(担当：河野哲也・中村百合子))

【目的（プロジェクトの目標達成に向けた位置づけ）】

陸前高田市、盛岡市、山田町、気仙沼市において、プロジェクトにおける、<1「地域フィールドワーク」と「哲学対話」の実現>、<2地域創生プロジェクトの立案・実施>の過程を実行し、「地方創生教育」のモデルケースとして進行を検証し、方法論を確立すること。

【実施した内容】

東日本大震災被災地域で図書館等を拠点とし、「地域フィールドワーク」と「哲学対話」を組み合わせた子ども向けのプログラムを下記のとおり実施した。地域フィールドワークでは、地域の人の協力を得て、自然散策や、地域特産の気仙茶のワークショップ、水山養殖場の見学、生態観察など多様なプログラムを行った。哲学対話では、フィールドワークの経験をもとに、問いを立て、話し合うことで、より多角的に地域のことを考えた。

H28/10/30「気仙沼てつがく探検隊」(気仙沼中央公民館、気仙沼図書館)

H29/03/04「プレ哲学教室あーだこーだ」(山田町立図書館)

H29/03/05「子どもてつがく探検隊」(気仙大工左官伝承館、箱根山テラス)

H29/06/24「第2回 子どもてつがく探検隊あ〜でもねえ こ〜でもねえ」(山田町ふれあいセンター、長崎Ⅱ遺跡、山田町立図書館)

H29/07/22-23「気仙沼てつがく探検隊」(旧月立小学校、八瀬川、八瀬・森の学校)

H29/08/27「第3回 子どもてつがく探検隊 あ〜でもねえ こ〜でもねえ」(山田町ふれあいセンター、四十八坂、八幡宮、山田町立図書館)

また、大人や大学生を対象に「哲学カフェ」を下記のとおり実施した。誰もが集まれる図書館という公共空間で、地域に暮らす人々から出された「問い」について、多世代で話し合い、考えた。哲学カフェとは、カフェでおしゃべりをするように気軽に哲学対話を行うというコンセプト

のものであり、参加の間口を広げるという意図も含む。そのため、多くの参加者が集まり、自身の地域に根ざした発言が多くみられた。

H29/04/30「哲学カフェ」（岩手県立図書館）

H29/06/25「哲学カフェ」（岩手県立図書館）

H29/08/26「哲学カフェ」（岩手県立図書館）

【方法】

初等中等教育と大学・研究機関、地方行政、企業、NPO、地元の学校や図書館と連携し、持続可能な地域づくりのため、地域に関連する知識や技能を広く学ぶ「プロジェクト学習」を実施する。ここでは、子ども達が、自分たちの地域の自然と文化歴史、さらにそこでの自分たちの未来の生活について、専門的知識を体験型のプロジェクトで学ぶことができる。さらに、多世代の人間が共に「地域におけるよき生活」の構築に貢献できるような場の基礎として、全員が同等の資格で参加し、相互の質疑や討論によって物事を根本的なレベルまで掘り下げる「哲学対話」を行う。地域の自然や歴史遺産に触れ体験を重ねたのちに、哲学対話により価値とビジョンの共有をはかるような「真正の教育」を実践する。そしてその成果や効果を提示・発信することにより「地方創生教育」のモデルケースを創出する。

a) 地方創生教育

(a-1) 東日本大震災被災地域での図書館を拠点とした「地方創生教育」

ここでは、幾つかの教育施設を拠点としながら、「地方創生教育」のモデルケースを実践した。

(a-1-1) 宮城県気仙沼市気仙沼図書館・本吉図書館での実践

(a-1-2) 岩手県山田町立図書館での実践

(a-2) 岩手県陸前高田市での実践：研究開発実施者の岩手大学の宇佐美と同じく岩手大学教授の五味壮平氏の協力を得て、上記の地域創生教育を行った。

【実施項目】

(a-1)

東日本大震災被災地域での図書館を拠点とした「地方創生教育」を行った。(a-1-1) 宮城県気仙沼市本吉図書館；(a-1-2) 岩手県立図書館・山田町立図書館での「地域創生教育」モデルケース（「地域フィールドワーク」と「哲学対話」、地域創生プロジェクトの立案）を実践した。

(a-2)

岩手県陸前高田市での実践：研究開発実施者の岩手大学の宇佐美と同じく岩手大学教授の五味壮平氏の協力を得て、「地域創生教育」モデルケース（「地域フィールドワーク」と「哲学対話」、地域創生プロジェクトの立案）を実践した。

気仙大工左官伝承館にて仕事内容や道具などについて話を聞いた後、気仙大工により手掛けられた正徳寺を見学。その後、哲学対話を行い、今と昔の違いについて考え話し合った。参加者の感想については、末尾の「資料：哲学対話の参加者感想」を参考にされたい。

2-3-2. (プロトタイプ実施 (担当：梶谷真司、河野哲也、寺田俊郎、直江清隆))

【目的(プロジェクトの目標達成に向けた位置づけ)】

東京近郊、及び他地域(宮崎、沖縄、広島、仙台、高知、京都)において地域の行政、図書館、学校、NPO、保護者などと関係を作りながら、<1「地域フィールドワーク」と「哲学対話」の実現>を実現するた

めの前段階の実験的試行(プロトタイプ)を行うこと。それらの試行を通して、各地域にあった実施形態を模索し、必要とされる準備を行うこと。

地域コミュニティの持続と再生のためには、人材育成＝広い意味での教育が欠かせないが、従来の教育は学校の中に限定されており、地域の社会や産業から切り離されている。その問題を解決するために、いかにして教育を学校の外へ開き、また地域コミュニティが学校に関わるか、その循環の仕方を考えなければならない。哲学対話は、様々な境遇、身分、年齢の人が共に対等に話をする場を作ることができ、この点で上記の目的のために貢献することができる。

【実施した内容】

「プロトタイプ実施」グループは、実施地域の地域性や人間関係などの特徴を把握しながら、aグループのような「地方創生教育」を実施する前段階の実験的な試行を行った。aグループは「プロトタイプ実施」グループに対して先行的な実践と事例の役割を果たしたため、aグループを参照しながらプロトタイプ実施を試みた。詳しい実施内容については、下記参照のこと。

【方法】

東京近郊、及び他地域（宮崎、沖縄、広島、仙台）において地域の行政、図書館、学校、NPO、保護者などに関係を作りながら、上記の過程を実現するためのプロトタイプを試行し、本格的な実施に向けた準備を行った。できれば、上記の1の過程（「地域フィールドワーク」と「哲学対話」）を実行した。本「プロトタイプ実施」グループは、「地域創生教育」グループにおける先行的な実践と事例を参考にしながら、実施地域の固有の地域性や人間関係などの特徴を把握し、地域の協力体制を整えながら、「地方創生教育」を実施する前段階の実験的な試行を行った。

参加者の感想については、末尾の「資料：哲学対話の参加者感想」を参考にされたい。

b. プロトタイプ実施

(b-1) 宮崎県五ヶ瀬・高千穂地域での実践（梶谷）

- ・ H28/12/18 「五ヶ瀬中等教育学校での哲学対話」（宮崎県五ヶ瀬町）
- ・ H29/2/10 「哲学対話イベント」（宮崎県高千穂町）
- ・ H29/8/3 「GIAHS アカデミーキックオフ研修」（宮崎県五ヶ瀬桑野）
- ・ H29/8/4 「文章の書き方講座」（高千穂町町役場）
- ・ H29/9/9 「高校生のための哲学対話・文章講座」（高千穂高校）
- ・ H29/9/10 「教員のための哲学対話研修」（高千穂高校）

(b-2) 東京近郊、広島県での実践（寺田）

- ・ H28/10/24, 10/31, 11/14, 11/28, 12/12
「哲学対話の授業」（神奈川県市立幸ヶ谷小学校）
- ・ H28/11/19 「哲学カフェ」（東京都神田）
- ・ H29/02/25,2/26,2/7,7/10,9/11 「哲学対話」（広島県呉市、竹原市）
- ・ H29/03/04,3/10,3/18
「就労支援機関における哲学対話」（東京都育て上げネット）
- ・ H29/03/16,3/21 「哲学対話」（東京都立武蔵高校）

(b-3) 宮城県仙台市および福島県いわき市での実践（直江）

- ・ H29/3/25 「いわき市での防災教育を活かした哲学対話」（いわき市薄磯団地集会所）
- ・ H29/5/27 「いわき市での小中学生との哲学対話」（いわき市薄磯団地集会所）
- ・ H29/6/17 「哲学対話」（福島県いわき市薄磯修徳寺）

- ・ H29/7/26,27,9/16「哲学対話」（いわき市薄磯団地集会所）
- ・ H29/8/18,19「哲学対話」（福島県いわき市チャイルドハウスふくまる研修室）

(b-4) 沖縄での子ども哲学の実践（河野）

- ・ H29/02/23「GV スペシャル哲学対話」（沖縄県那覇市）
- ・ H29/2/24「哲学対話の授業」（沖縄市立室川小学校）
- ・ H29/2/24「哲学カフェ」（沖縄県浦添市）
- ・ H29/2/25「りゅう PON！てつがくカフェ」（沖縄県琉球新報社）
- ・ H29/2/25「哲学カフェ」（ジュンク堂那覇店）
- ・ H29/2/26「哲学対話のすすめかた」（琉球新報社）
- ・ H29/2/27,9/19「哲学対話の授業」（比屋根小学校）
- ・ H29/06/10「GV スペシャル哲学対話第二弾」（沖縄県那覇市）
- ・ H29/9/17「哲学カフェ」（ジュンク堂那覇店）
- ・ H29/9/18「第4回りゅう PON！てつがくカフェ」（沖縄県琉球新報社）
- ・ H29/9/18「哲学対話のすすめかた（初心者向け）」（沖縄県琉球新報社）
- ・ H29/9/19「哲学対話の授業」（高原小学校）

(b-5) 高知県での地域おこしをテーマとした協働探求プロジェクト（河野）

- ・ H29/09/06「町おこし協力隊との哲学対話」（高知県四万十市役所）
- ・ H29/09/07「哲学対話の授業」（四万十市立大用小学校）
- ・ H29/09/07「哲学対話の授業」（四万十市立川登小学校）

(b-6) 京都府法華宗妙満寺での実践（寺田）

- ・ H29/07/29「哲学カフェ in 妙満寺」（京都市左京区妙満寺）
- ・ H29/07/30「哲学カフェ in 妙満寺」（京都市左京区妙満寺）
- ・ H29/09/30「哲学カフェ in 妙満寺」（京都府左京区妙満寺）

【実施項目】

(b-1)

研究開発実施者の梶谷と、梶谷が3年前から哲学対話教育で関わっている宮崎県の五ヶ瀬中等教育学校、高千穂高校、宮崎大学および現地のNPO 法人グローバルアカデミーの田阪真之介氏が協力しつつ上記地域での地方創生教育を行った。

〈具体的内容〉

① 五ヶ瀬中等教育学校による地域住民との交流

宮崎県の五ヶ瀬には、中等教育学校があり、そのSGH（Super Global High School）の一環として、4年前から哲学対話の講習を行っている。これは思考力の育成とコミュニティ作りという二つの大きな目標をもっていたが、とくに後者が重要である。というのも、この学校は、若い世代の移住と、将来地域（五ヶ瀬のみならず宮崎）に貢献する人材の育成という、いわば学校による地方再生の試みとして設立されているからである。このことは、教員も生徒もはっきり意識しており、それが教育カリキュラムにも反映されている。

② 高千穂高校 GIAHS アカデミーの活動支援

高千穂地域は、2015年に世界農業遺産（GIAHS）に認定されている。その際に書類の作成や高校生のプレゼンターを育てるのに協力したNPO 法人グローバルアカデミーが、世界遺産認定後、普通科の生徒に対してGIAHS アカデミーという教育プログラムを立ち上げ、高千穂高校の意欲ある7名の生徒が参加している。このプログラムは、今年の3月に宮崎県教育委員会、宮崎

大学、高千穂町町役場、高千穂高校の連携機構ができ、そこで高校生たちは、地元の農業と地域社会の在り方を学び、地元の人との交流も積極的に行っている。そこで RISTEX の課題として、以下の 2 つの目標を掲げた。一つは五ヶ瀬同様、高校生たちが哲学対話の技法を身につけることで、様々な課題を発見・探求するとともに、地域住民との話し合いに活用できるようにすること。もう一つは、哲学対話的な話し合いをベースにして文章の書き方を学ぶことで、彼らが地元の農業の取材をして自分たちで発信できるようになることである。

(b-2)

これまで行ってきた小学校での哲学対話実践をモデルとして、同様の哲学対話の授業の場を東京近辺での展開に取り組んだ。また、広島県竹原市において、地域創生を考える市民グループと連携し、フィールドワークと哲学対話を組み合わせたプログラムを試行するとともに、地域の小学校での哲学対話の授業を実施した。

〈具体的内容〉

- ① 持続可能な開発のための教育(ESD)における哲学対話：小学校の地域と連携した教育における哲学対話の適切な活用方法の開発を目的とした。内容は、小学校 6 年生に対して五回の哲学対話、小学校 5 年生に対して二回の哲学対話を実施した。
- ② 広島県竹原市における地域フィールドワークと哲学対話：地域の諸問題を考えるための哲学対話の適切な活用方法の開発を目的として、広島県竹原市において竹原市の二地区においてフィールドワークとそれに基づく哲学対話を実施した。
- ③ 広島県呉市・竹原市の学校における哲学対話：小学校を拠点として地域の諸問題を考えるための哲学対話の適切な活用方法の開発を目的とした。ここでは、広島県竹原市立大乘小学校において三回、広島県呉市立豊小学校において二回哲学対話を実施した。
- ④ 東京における市民のための哲学対話：東京神田で「ふるさと」をテーマにした市民のための哲学カフェを実施し、都市部の市民が地域の問題を考える場としての哲学対話の有効性の検証を行った。
- ⑤ 東京近郊の学校における哲学対話：東京都立武蔵高等学校で高校 1 年生に二回の哲学対話を実施することで、若者が地域の諸問題を考えるための哲学対話の適切な活用方法の開発を目指した。
- ⑥ 東京近郊の就労支援機関における哲学対話：若者が地域の諸問題を考えるための哲学対話の適切な活用方法の開発を目的とし、NPO 法人「育て上げネット」の研修として哲学対話を実施した。

(b-3)

福島県いわき市、双葉郡における災害復興や防災教育に携わってきた松本行真氏・久利美和氏らの協力を得ながら、学校から地域に場を拡大し、学校や哲学カフェとは違った手法の開発に取り組んだ。福島県いわき市は、復興事業が進んでいる。ここで、子どもと大人世代が混じって地域と自分たちの未来について哲学的に議論し、被災地における対話的問題解決の手法を行った。

〈具体的内容〉

福島県いわき市豊間地区、四倉地区において、防災教育と平行して、まちづくりを見据えた哲学対話を複数回開催し、学校や哲学カフェとは違った手法を試行した。

(b-4)

琉球新報社やジュンク堂那覇店と連携しながら、哲学カフェおよび哲学対話のファシリテーター養成講座を実施した。また、県内2校の小学校での哲学対話、卒業後のキャリア選択肢を増やす活動をしている会社「カッシーニ」の代表取締役社長である高校生、仲田洋子氏らへのインタビューと哲学対話を行った。

〈具体的内容〉

① 沖縄における高校生のキャリア意識の育成：沖縄には、産業構造が単純であるため、進学校の高校生でも、特段の熟慮もなく医者か銀行員か公務員を選ぶ傾向が強く、それ以外は非正規労働になりがちである。そのような現状に疑問を感じて、沖縄の若者に自分のキャリアについてもっと幅広く考えてもらおうと自ら起業した高校生が、仲田洋子氏である。このプロジェクトでは、彼女の会社の趣旨にも合う活動として、沖縄の高校生と哲学対話の機会を一緒に作るようになった。そのさい、彼女がかつて通っていた予備校グレートヴォヤージュ（代表・大岩光昭氏）にご協力いただき、3月と5月の2回にわたって、予備校で哲学対話のイベントを開催した。また対話イベントに先立って、仲田氏に自分の活動についてインタビューも行った。

② 沖縄県那覇市における哲学対話実践：那覇市では、下記3つのプログラムを行った。1)街中での大人や子供、親子を対象とした哲学カフェの実施 2)小学校での哲学対話の授業 3)ファシリテーター養成講座。哲学対話の機会の創出および、哲学対話が地域で独自に行われるようにファシリテーターの養成を行い、地域の政治的問題を対立的構図から創造的な解決が望める対話的方法論の提案を行った。

(b-5)

哲学対話による価値構築からより具体的なプロジェクト学習に移行するために、地域おこし団体である「四万十市の地域おこし隊」と連携し、子供の教育プロジェクトの新たな展開の可能性を開いた。

〈具体的内容〉

急激に高齢化と過疎化が進んできた高知県において、若者の地域おこし団体と、実質的権限をもつ高齢者世代とのコミュニケーションにおける問題や課題を、哲学対話の手法を用いて取り組んだ。そこで、高知工業高等専門学校の学生や、高知大学地域協働学部の学生、立教大学の教員・学生がさらにそのコミュニティに加わることによって、共同体の発展を促進し、新しく建設が進んでいる県立図書館とも連携を目指した。

(b-6)

寺院を利用することで、都市文化的な哲学対話ではなく、地域に根ざしながらうまく活用されていない場所を対話の場として開いていくためのモデル構築を目指した。

〈具体的内容〉

京都の寺院における哲学対話の実施をすることで、京都洛北妙満寺における市民のための哲学対話を実施し、地域のコミュニティ・スペースとしての寺院における哲学対話の有効性の検証を行った。

3. 研究開発結果・成果

3-1. プロジェクトの目標達成状況及び結論

本プロジェクトの目的は、多世代に渡る哲学対話とプロジェクト学習を推進し、「地方創生教育」のモデルケースを創出することにある。そのために、東日本大震災被災地域での図書館を拠点とした①「地方創生教育」を本格的に推進すると同時に、日本のさまざまな地域でその準備段階たる②「プロトタイプ実施」を行った。H28年9月からH29年7月までのアウトプットは以下のようである。

第一に「研究開発面」としては、東北被災地の「地方創生教育」では、「子どもてつがく探険隊」という環境体験学習と哲学対話を組み合わせた教育プロジェクトを、陸前高田市、山田町、気仙沼市で各3回実施した。環境体験は、子どもに本物の自然と文化に直接に触れる感動と、地域についての気づきや学びをもたらすことに成功した。その後の哲学対話も、体験をメタ的に反省する非常に充実したやりとりになり、同伴した大人との関係性も深まった。とくに環境体験については、場所の選定とガイド役の役割がきわめて重要であり、知識と直接体験の相互作用が深い学習をもたらすことが分かった。28年9月からの実施で、「子どもてつがく探険隊」は地方創生教育の初期段階のモデルとして着実に根を下ろしつつあり、もう1年間サイクルさせたのちにはプロジェクト学習の段階に着手できる。

また「プロタイプ実践」では、その地域において哲学対話の教育的意義と効果を実感してもらうことに重きをおいた。寺田は、東京近郊の小学校(28.10~29.3)で、持続可能な発展をテーマとした哲学対話を試み、小学生も哲学的に粘り強く議論し、メタ対話的な反省もできることを示した。また、就労に困難のある青年向けのトレーニングに哲学的対話を組み込み、自己表現し議論し反省的に考えることにより成果向上することを示した。また寺田は、地元からの要請に応じて広島県竹原市の小学校で地域哲学対話を実施した(29.2)。梶谷は、宮崎県五ヶ瀬・高千穂地域の中高で生徒と地域住民と哲学対話を行い、ファシリテーションの仕方、各生徒の話す・書く力を伸ばす実践講座を開催した。梶谷と河野は、沖縄の女子高生で起業家の仲田洋子氏を交えて、沖縄でキャリア形成に関わる対談と哲学対話(29.2-3)を行った。河野は、琉球新報社における子ども哲学カフェとファシリテーション講座、ジュンク堂書店での哲学カフェ、前田ユブシが丘児童センター、比屋根小、室川小で哲学対話を実施した(29.2)。直江は、東北大学災害科学国際研究所が交流してきた福島県いわき市・双葉郡で、地域の魅力や人材育成と教育などをテーマとした約10回(28.10~29.8)の哲学対話を行った。

第二に、「社会実装面」では、東北地方での「子どもてつがく探険隊」の活動は、回数を重ねるごとにこの教育実践の重要性を図書館員、教育委員会、市職員、教員も実感してもらうことができ、子どもからの反響もとても良く、地域の人々のさらなる関与を引き出している。岩手新報社や共同通信社などをはじめとしてメディアからの取材もしばしば受けた。陸前高田では岩手大・立教大のグローバルキャンパスと連携が深まり、山田町では町立図書館と県立図書館の支援、さらに地域小学校からの要請で、29年8月には学校でも実践することになった。気仙沼の教育委員会と図書館による協力は格別であり、地域のリーダーシップ養成のための少年団の企画に完全に入り込むことができ、7月には1泊の自然体験キャンプと哲学対話、図書館での調査を含めた理想的な教育プロジェクトを実行した。これをもう1年間回転させたのちにはプロジェクト学習に着手できる。宮崎、沖縄、東京近郊、福島での学校における哲学対話も軌道に乗りはじめており、地域創生をテーマとした内容や体験学習と結びつけていく段階になりつつある。広島および河野が開始した高知四万十地域での対話はこれから数度実施していき、本教育プロジェクトの意義と効果の理解をさらに得るべき段階である。

3-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョンへの回答

<リサーチ・クエスチョン>

PJ-Q1. 持続可能かつ持続的に成長する地域をつくるために必要な「地方創生教育」はどうあるべきか？

本プロジェクトが想定する「地方創生教育」は地域フィールドワークにおける環境体験、哲学対話による経験の共有と認識の深化、図書館におけるプロジェクト学習による地域資源の活用方

法の考察、という三つの活動の循環により形成されるものである。そこにおいては、地域内外の大人（地域産業従事者・NPO・専門家）を情報のリソースとし、子どもらが地域を主体的に考えることが出来る様な循環構造の構築を目指すべきであると考えている。「1-1.」でも述べた点ではあるが、地域の発展には地域資源を知り、その地域の産業に活用できる人材の育成が必要とされてくる。それは、地域の価値について見直し、感じ直し、語り直す「文化」をその地域に根付かせることにより達成されるものである。

故に、この教育は最終的に地域の子どもと大人が主体となる様に緩やかな導入を意識しなくてはならない。学校教育への導入を想定した際に生じる教科単元との兼ね合いだけではなく、ただの外部からの押し付けでもない、「地方創生教育」が一つの選択可能な教育実践として地元の協力者の参与の下で、進行されていく。「地方創生教育」は、そうした手順を踏んだ教育手法が継続・維持され、活動の主体も移行していく中で達成されるべきものであると考えられる。

また、何かその地域で広く共有されうる「課題」、「テーマ」をもつことも重要である。東北被災地は町と産業の再生、五ヶ瀬や高千穂は農業、沖縄は若者の将来のキャリア形成などがそれに該当している。それが教育と密に結びつくこと、可能であるのなら学校の活動の一部に組み込まれることが必要とされてくる。ところが、学校教育は、文科省の教育指導要領によって全国で統一的に管理されているため、そうした地域の事情を考慮した教育を行うことが非常に難しい。それでも昨今では、アクティブラーニングが導入されたことにより、その時間を上手く活用することにより導入の道筋はある。

PJ-Q2. 多世代哲学対話とプロジェクト学習を組み合わせた本プロジェクトが採用するモデルケースは、それが子どもたちと地域内外の大人たちが問題解決に向けて共に考え共に学び共に活動する機会としてどのような有効性をもつか？

本モデルケースの多世代参加の機会としての有効性は、東北被災地や沖縄での実践で言えば、地域住民の協力並びに行政機関及び教育委員会との連携により保証された教育的機会及び場が与えられている点と、「哲学対話」そのものが有する多世代参加可能性により示される。本モデルケースの開催場所として、各機関との連携の下、地域においてニュートラルな学びの場として図書館や学校などが用いられた意義は大きい。図書館は地域のあらゆる政治的な位置から一定の距離を置いた公共空間であり、そこでは子どもと大人の区別なく「哲学対話」の中で「地域フィールドワーク」での環境体験を共有し深化することが可能となってくる。

また、「哲学対話」により緩やかに異なる見解、経験の受容の幅を拡張していくことも、その多世代間の対話可能性を拓けることに有効である。同世代から始まり、回数を重ねるごとに手法への習熟と対話の世代を重ね、最終的に異なる世代間の深いレベルでの対話が可能となる。この様に、空間、手法、そして将来的な展開において問題解決に向けて本モデルケースは一定の有効性を示している。

しかしそうした有効性を踏まえつつも、結局は、どのような子供とどのような大人が関わるのかという点は問題として付きまとう。子ども大人の区別なく、「哲学対話」や「プロジェクト学習」に参加しうるのは、極一部の人たちでしかない。それが、最終的に、この地域の課題解決に現在や将来関わるであろう人たちのなか、またそのような人たちであることが望ましいのか、それ以外の人たちが関わることも必要なのか等、様々な問題に突き当たる。ただし、実現可能性を考慮するならば、宮崎のNPO法人グローバルアカデミーや、沖縄の予備校グレイトヴォヤージュのように、現地で核になりうる組織や団体、個人の存在が不可欠である。また、こちらがいくら良い展望を思い描いても、それがその地域に本当に適しているのか、現地でその意識を共有して活動する人が存在するのか、結局はそれにかかっており、それは必ず尊重すべき点であるだろう。こちらが外部から現地の実情に合わない計画をもってそれを押し付けるようなことはあってはな

らないのである。

PJ-Q3. 具体的に、この教育モデルを地域のどのように浸透させるか？

教育モデルの地域への浸透は「1-3.」にて提示されたロジックモデルの手順の通りに進められる。地域の協力者、行政機関や教育委員会などの連携により中・長期的に教育モデルを継続・維持していく中で、最初の参加者がその後の世代に教育モデルとして実践し、継承していく。その3年、5年サイクルの中で最初は学びの場であったものが、地域の課題解決へと拡張され循環構造が構築されていくことが望ましい。

その場合、「PJ-Q2.」でも述べたように、現地で核になって活動する組織や個人が不可欠である。彼らこそ、その地域のキーパーソンや課題に通じており、現地で人々を結び付けていける人たちである。本プロジェクトでは、彼ら自身の活動に哲学対話や文章講座を無理なく組み込めるようにするよう心掛け、その解決策に関し検討を行うようにしてきており、それによってこちらにも新たな着想を獲得できる。このように、基本的には地域の協力者、核となる組織や個人との連携の輪を内から広げ、活動を地域主導の下で自然に継続していく中でその浸透は達成される。

補足する点として、対象となる地域により抱えるコンフリクト、 이슈ーが異なる点には留意しなくてはならないだろう。これは事前調査だけではなく、その地域との交流や哲学対話の際に表出される傾向などにより具体化されていくこととなる。

PJ-Q4. 子どもに環境や地域創生の問題に関心を持ってもらうにはどのような方法が有効か？

子どもらは環境という単語を教科教育の中で学び、環境学習により肉付けを行おうとするが、実際の地域の環境に触れ、自身に関わる具体的な課題として考え、深める機会には恵まれていない。また、子供に限らずどの層の住民も、その地域の人の生活や将来に直接つながっていること、直接ではないにせよ、結びつきが想像しうることにしか、結局のところ関心は持ちえない。この遠因として、既存の学校の授業において、自分たちの生活や将来と直接には何ら結びつきをもっていないものが大部分であり、受験をすること以外に強い理由が見当たらないことが挙げられる。こうした教育の意義の曖昧さ、不毛さは、地方創生に限った問題ではなく、日本の学校教育全般に言えることだが、それを「教養」や「いつか役に立つ」といったもっともな様に聞こえる逃げ口上で片付けるべきではない。

本プロジェクトではそうした問題意識を踏まえた上で、被災地域の子どもらを対象に「子ども哲学探検隊」、「地域フィールドワーク」として環境体験学習と哲学対話が一体となった催しを行った。環境や地域創生への関心の喚起に必要なのは座学以上に、当事者意識を育む為のリアルティ、自分の生活への結びつきである。自らが所属するコミュニティの周辺環境に体験学習を通して触れることや、他者の感想や見地を哲学対話で認識することで環境や地域創生へのイメージ、自身の生活への結びつきが具体化される。その点でも、Q1でも述べたように、その地域に共有されうる「テーマ」の存在が不可欠である。それも、一部の大人だけに関わるのではなく、子供や若者にとっても関わりのあるものである必要がある。対話にせよプロジェクト学習にせよ、そうしたテーマとの関連で位置づけ、構想する必要があるだろう。

PJ-Q5. 地域によって異なる政治的な 이슈ーに向き合い、それを解決するにはどうすればよいか？

前述の「PJ-Q3.」で述べた通りである。「地方創生教育」の導入、浸透の過程の中で、地域課題解決に向けた対話のさなかで具体化され、異なるものとして理解・共有され達成されるものである。哲学対話の範囲が学びの場から地域課題の解決へと拡大された時点で、異なる経験、思想信条を踏まえた上での対話が可能な場は形成されている。その際、異なるものとしての理解の深化が目指されていくこととなる。

また、「PJ-Q2.」から述べ続けているように、地域で核になって活動する組織や個人の存在の必須である点を強調しておきたい。現地の政治的な課題が何か具体的に理解し、そのために必要なものや人を探し出して繋ぐことができるのは、そうした地域で明確な意識をもって活動する人たちである。ただし、彼らだけでは解決が難しい問題や局面もあるだろうし、そういう状況においては私たちのような外部の存在、「よそもの」の関わりにおいて力になればいいと考えている。

3-3. 領域のリサーチ・クエスチョンへの回答

以下では、領域のリサーチ・クエスチョン（平成 28 年 11 月現在）を簡略化して見出しとしています。全文については、下記をご参照下さい。

領域 WEB : <http://ristex.jst.go.jp/i-gene/introduction/research-question.html>

領域-Q1. 持続可能な社会に向けての多世代共創の意義とは？

もとで深い議論を交わすことができ、新鮮な目で地域を見直し、根本問題に目を向けることができる。これらの教育を正規の授業だけではなく、課外活動、サマースクールのような保護者・地域住民が参加する活動によって行う。教育を通して地域を愛し、かつイノベーティブな新しいタイプの人材を生み出す教育方法を実現することになり、人材の輩出を通して、持続可能であり、また持続的に成長する地域を生み出すことが可能となる。

領域-Q2. 特に若い世代が多世代共創的活動に参加するインセンティブとは？

若い世代（学生、若年層、子育て世代のいずれにおいても）の大きな関心のひとつは、子育てと子どもの将来の雇用にある。多世代共創的活動に、これらの若い世代が積極的に関わってもらうには、高齢の世代がいかに子どもの成長と教育を支援するかに掛かっている。その際に重要なのは、子どもや若い世代の発意と自主性を重んじることである。

本プロジェクトはそのような発想に基づいて企画されている。若年のうちから持続可能な地域づくりの取り組みに関わってもらい、子どものアイデアに基づいた地域創生活動を行うというのが、本プロジェクトで提案する「地域創生教育」である。

申請者たちが目指しているのは、地域の教育と大学・研究機関が連携し、多世代に渡る「哲学対話」と「プロジェクト学習」を推進し、子どもたちと地域内外の多世代の人たちが課題解決に向けて共に考え共に学び共に活動する機会となるような「地方創生教育」のモデルケースを創出することである。この教育プロジェクトでは、地域の知的イノベーションの拠点は、大学や研究

所、地方行政、企業、NPO、海外教育機関と連携した地元の学校や図書館、美術館に設置され、ここから新しい産業や地域活動が創出される。

ここで行われるべき教育は、さまざまな知識や技能を活用して、実際の社会の文脈における課題に取り組む「真性の教育」である。その方法論として特に重視されるべきは、相互理解と価値創出、合意形成のための哲学対話であり、その対話に基づいて特定のプロジェクトを推進させながら、関連する知識や技能を広く学ぶプロジェクト学習である。この教育は、正規の授業だけではなく、課外活動、サマースクールのような保護者・地域住民が参加する活動によっても行われる。

近年、日本各地で興隆している哲学対話は、全員が同等の資格で参加し、相互の質疑や討論によって物事を根本的なレベルまで掘り下げる哲学の実践である。ファシリテーターの導きと質問によって誰もが自分の立場を反省的に問い直し、問題の本質に向き合い、それまでよりも深い次元での議論と解答を求められる活動である。世代間のディスコミュニケーションは、この価値の根本を問い直し合う哲学対話によって克服される。この地域を活性化する教育にとって重要なのは、「よその、わかもの、ばかもの」と言われる（桑子、2016）。それらの人々が大切なのは、それまで地域の大人たちが無自覚のうちに前提としてきたことを新鮮な目で捉え返し、当然視されてきた価値や慣習や考え方を全く別の角度から問い直すからである。地域の中心を成す層からは外部のあるいは周辺の視点から、その地域の価値と未来を対話し直したときに、その地域を創生するアイデアが生まれるのである。このように子どもと若者にイニシアティブをとった地域創生を行うことこそが、その世代のインセンティブを高めるのである。

領域-Q3. 効果があるのに多世代共創に参加しない場合の世代別の方策とは？

本プロジェクトに関して、十分な動機づけがない世代、或いは層というものは想定されえない。あらゆる年齢層の大人はその地域の内外に参加に関わらず、子どもらにとっての情報のリソース、導き手足りうる存在であり、多世代哲学対話の顕在的・潜在的な参加者である。それを踏まえた上でより更に十分な動機や機会を提供するというのであるならば、「地方創生教育」グループの事例を参考に、参加の機会や場を拡張、或いは緩和することで対応することが考えられる。

「地方創生教育」グループでの活動においては、教育機関との連携により学校での哲学対話を実践し、公共図書館を多世代参加型の哲学対話の場とした際には「子ども哲学探検隊」を行い親子や地域住民の参加を促し、他方では地域の住民全体に対するものとしてより思想的なものを核とした「哲学カフェ」を開催した。各図書館でのそれらの催しは参加する年齢層に一定の差異が生じており、これはそれぞれのニーズに対応する個別的机会でありながら、「哲学対話」という将来的な共通の対話手法を獲得するための契機となりうる。方策として具体化するなら地域の要求に応じ、図書館の利用者を鑑みた「哲学対話」への多様な参加機会の設定が有効なものとなるだろう。加えてこれらの実践の場となるのは、公共性により地元の間人関係からニュートラルな場としての図書館である。あらゆる思想から一定の距離の置いた空間で対話が行われることでその精神的負荷を緩和し参加を容易にすることになる。

この様に制度・企画をそのままに、運用可能な範囲内で参加の機会を増やし、参加のハードルを下げ関心を喚起させることで多世代参加をより容易なものへとすることとなる。

領域-Q4. 持続可能な社会及び多世代共創における新技術の影響や含意とは？

提案の内容に該当しない

領域-Q5. 多世代共創的活動は人々にどのような意識変化をもたらすか？

申請者たちが提案する本教育プロジェクトは二重の意味で多世代共創的である。ひとつは、本プロジェクトで実施する教育自体が、多世代を巻き込む形になっている点である。「地域フィールドワーク」では、地域の生態系や歴史文化について大人たちのリードのもとでさまざまな体験学習がなされ、過去からの知識や知恵が提示される。それを受けて、「哲学対話」では、地域内外（ときに海外から）の大人たち（高齢者から大学生を含めた若者まで）と子どもたち（児童生徒）が、体験したことに関連して対等な立場で地域の価値とあるべき姿について哲学的レベルで話し合うことになる。そして、プロジェクト学習では、子どもたちは地域創生のアイデアを出し、それを実施し、その実現のためのリソースや方法を大人たちが提供する。

第二に、本プロジェクトは、この地域創生教育を受けた子どもたちが成長し、数年後には今度は若き大人としてこの教育実践をさらに下の世代に実施していくサイクルを作る点で多代的である。そうして最終的に、教育の世代間の循環を経て、地域の価値について見直し、感じ直し、語り直す「文化」をその地域に根付かせることを、本プロジェクトは目的としている。このような状態が成立したときには、「多世代」という言葉を使わなくてすむほどに、さまざまな年齢の人間が共に「地域におけるよき生活」の構築に貢献できるようになるのが最終目標である。

近年、日本各地で興隆している哲学対話は、ファシリテーターの導きと質問によって誰もが自分の立場を反省的に問い直し、問題の本質に向き合い、それまでよりも深い次元での議論と解答を求められる活動である。哲学対話は結論をあえて与えないオープンエンドの終わり方もあるが、他方で、桑子敏雄（東京工業大学）が実施している「談義」のような問題解決を目指すやり方もある。桑子による「社会的合意形成のプロジェクト・マネジメント」は、環境や開発に関わるコンフリクト、まちづくりをめぐる対立に、「談義」という哲学的対話を通じて深いレベルでの参加者の相互理解と同意をもたらし、その上で、実際の地域づくりを実施していこうとする活動である。桑子はこれまで数々の地域の開発や産業化、環境などをめぐる対立を哲学対話によって問題解決してきた。

こうした活動を教育分野へと応用し、いわば初等中等教育において「持続可能な地域創生教育」を実践することが本プロジェクトの趣旨である。ここでは、ファシリテーターは自ら解答を与えることなく、参加者の議論を深め、思考を促進することにより、問題解決を創発的に生じさせる助産師の役割を果たす。こうして子どもたちは、自分たちの地域の自然と文化歴史、さらにそこでの自分たちの未来の生活について哲学的に議論する。この深みこそが、これまでの地域創生に足りなかったことである。この対話の過程では、参加者たちの視野を広げるために、異質な視点を導入することがきわめて大切である。すなわち、他の地域の子どもや他の地域から住み着いた人たち、留学生のような海外の人々などにも対話に参加してもらい、異質な目で地域を見直し、問題を見つけ、評価できるようにすることである。

領域-Q6. 多世代共創が社会に普及・定着するには？

- ・（オリジナル Q6）社会実装を軌道に乗せるために、どのような戦略や配慮が有効か？
 - (1) 多世代共創の仕組みが生まれるような仕組みはどのようなものか？ どう作り得るか？
 - (2) 担ぐ人の育成：多世代での推進役が必要と思われるが、それはどのように確保できるか？
 - (3) 場：空間的な場の確保と同時に場の特性を維持・改善していくためにはどうしたら良いか？
 - (4) 活動基盤：ファイナンスが大きな条件だが、それ以外にどのようなものが考えられるか？
また、ファイナンス上のネックにはどのようなものがあるか、どう乗り越え得るか？
 - (5) 社会的認知の上げ方：熱心な賛同者、おとなしい理解者、無関心な人、反論をしてくる人、類似の活動をしている人、など様々な人がいる中で、どのように社会に浸透していくか？

- (6) 自治体との関係：分野によっては重要であるが、自治体には、公平性重視、縦割り、外部への警戒感などの特性があるが、一方で個人として応援の気持ちを持っている人もいる。こうした構造の中で、どう協力を取り付け社会実装につなげるか？
- (7) マニュアル化などが可能か？

これまでの回答でかなり答えられているように思われるが、(1)は繰り返しになるが、多世代間の地域創生教育を循環的に成立させ、地域の価値について見直し、感じ直し、語り直す「文化」をその地域に根付かせることである。

(2)～(5)については、地域の特性に応じて異なった回答となるだろう。

地域の人々にとって、上から降ってくるようなプロジェクトはむしろ迷惑であるだと思っている場合が多いことを自覚しておいたほうがよいであろう。地元から理解を取り付け、計画に参加してもらえるように浸透するには非常に時間がかかり、こちらから一方的に抽象的なスローガンや目的を押し付けては、自治体の中にも拒否反応が生じて仕方がないところである。

具体的に言えば、申請者のプロジェクトでは、すでに地域とのつながりのある人々を介して、地域に紹介してもらう手順を踏んでいる。申請者のプロジェクトは教育に関連するが、地元ですでに関係をもっている大学関係者、新聞社、テレビ局、図書館、博物館、地元のNPO団体といった多重な知り合いを通して、さまざまな分野の地域の教育委員会、教員、教育関係者、保護者を紹介してもらうという段階を踏むようにしている。これらの人々に地域での活動の協力者になっていただくのだが、そのためには足繁く、頻繁に現地に通い、厚い人間関係を構築する必要がある。これは単純に制度的に対処できる問題ではなく、地域の人々に個人として人間性を信頼してもらうことが肝要である。

以上の人々が比較的年齢の高い層であるとすれば、比較的若い成人や若年層は、地域（たとえば、陸前高田）出身の大学生（たとえば、岩手大学）を頼りにつながりをつけていき、若い世代の保護者にアプローチしていくことになる。そして、本プロジェクトでは、本プロジェクトで教育を受けた世代がさらに若い担い手として成長する循環を形成することが最も重要である。そして、新聞やテレビ・ラジオなどのマスメディアで報じてもらい、地域での認知度を高める必要がある。地元の活動は、地元の広報誌や図書館・美術館などを通じて、できるかぎり広い範囲で認知してもらえるようにする。

場については、本プロジェクトでは、学校、図書館、博物館、公民館、そして大学のサテライトといった場所が活動の拠点となる。ある意味で、地元の間人間関係からニュートラルな場所を提供することが大切であり、同時に、地元出身ではない人々（「よそもの」）、たとえば、大学生や留学生、場所の異なる学校の保護者、児童生徒を取り込んでいくつもりである。哲学対話は、普段とは異なる人間関係の場として、普段は積極的に発言しない人や、参加に消極的な人たちが意外なほどに発言していく。このことは、桑子の活動（2016）や河野（2014）が示す通りである。

領域-Q7. 多世代共創の程度と持続可能な社会への有効性を評価するための指標とは？

有効性を評価するための指標は、各地域における実践状況と対話内容の変化の分析により行われる。本プロジェクトは多世代「哲学対話」を中核として形成されるものであり、その評価の為の指標はその教育実践それ自体への習熟と、学びの場から地域の課題解決へと拡大できたから否か、ということから判断される。これはファシリテーター並びに計画者により判断されるものであり、参加者に対して活動後に配布するアンケートに対する解答からもその判断の確度が補強されることとなる。

中間的な指標としてならば、哲学対話が地域で継続されており、対話に習熟した若い世代の大人

が更なる若い世代に対して「哲学対話」を教授し、自身らは地域資源に関してより上の世代と対話可能な状態になっている状況が考えられる。

領域 Q-8. 持続可能な社会及び多世代共創における地域の自然の意味とは？

「地域らしさ」というものは既に具体化されている文化表象と、未だ具体化されていない暗黙性の中に存在している。

前者に関しては、「領域 Q - 5.」でも触れたように地域の大人たちの先導の下、既存の産業や地域の生態系、歴史文化に触れることで獲得される過去からの集積知である。だが、持続可能な社会において新たに掘り起こす必要があるのは、後者の方、地域の生物多様性及び環境の回復力の中に埋め込まれた持続可能な文化としての自然である。これは、地域フィールドワークによる体験を経て、哲学対話により問題を深め、プロジェクト学習における文献調査を経て漸く子どもらの「気づき」、「見分け」により既存の知識では見えない観点から発見される現在新たに発見され、未来に引き継がれるべきものである。これらの重要性は対話により深化し、自身の未来の生活を想定することで始めて具体化されるものである。地域による独自の途を見出すことが可能か、という点であるが、自然が地域の暗黙性の中に存在する以上、既にその対話における深化の方向性も含めて独自の形質を有していると考えられる。

PJ のリサーチクエション

① 政治的なホットな 이슈になっている問題をどのように取り上げていくべきか（それを避けて通るようでは意義が問われる。一方、取り上げ方によっては偏向教育として抵抗を受ける。では取り上げ方のガイドラインとなるようなものは作れるのか？）。

本プロジェクト、とくに東北被災地での地域創生教育のプロジェクトは、環境体験学習（「地域フィールドワーク」）とその体験をもとにした哲学対話からなっている。ここで、まず子どもたちに考え、議論してほしいことは、直接的に政治的な 이슈ではない。地域の未来をどう構築するかを、地域の持つ普段は気づきにくい価値をもとにして構想してもらい、少なくとも数年はかかる教育プロジェクトである。したがって、かならずしも、現在、大人たちが関わっている政治的な 이슈がそのまま子どもにとっての地域の未来と関わっているとは限らない。

しかし、この Ristex のプロジェクトを始動する前に行った事前の地域との交流・事前調査では、ある東北被災地で「環境体験学習を基礎とした教育を行いたい」と提案したところ、私たちのところに電話による激しい口調での疑義が地域の住民からあった。その場所での「環境」問題とは、すなわち防潮堤の建築の範囲をめぐる政治的な立場からの対立を指しており、「そうした教育はどちらの側にせよ、困る」という疑義であった。しかし私たちのプランを詳しく説明し、実際に行われた「子どもてつがく探検隊」を見て、その方の疑義は収まった。

本プロジェクトが目指すのは、現在の政治的対立のどちらかに付くような教育ではない。本プロジェクトのモデルのひとつは、計画書でも触れた桑子敏雄による地域のコンフリクトについての合意形成を目指す「談義」の活動である。桑子は、社会的合意形成とプロジェクト・マネジメントという二つの方法を統合し、インフラ整備を基礎とするまちづくりのコーディネータやアドバイザーを務める実践を行ってきた。桑子は、ある地域の対立や紛争の構造を認識し、解決を目指した「談義」を行うことを求める。中でも特徴的なのは、「ふるさと見分け・ふるさと磨き」と呼ばれるもので、地域の人々が暮らす空間の個性と独自性を見出すワークである。参加者は、自身の五感と頭をはたらかせながら地域を歩き回り、日頃目に入っていなかった空間をよく観察する。観点は地形、地名などであり、

地域の空間構造を把握するために行われる。それと共に桑子は、人々の関心や懸念を掘り起こし、「わがまち再生」の理想を掲げ、市民や専門家・行政が連携して、対立を克服しながら目標に至る全体のプロセスをプロジェクトとして設計、運営、進行を行うというものである。プロジェクトは、各地で成功例を生み出しており、豊富な実践報告も為されている。桑子による談義の実践は、哲学的な対話が、地域住民に自身のもつ根本的な価値観を自覚させ、それを率直に議論することによって深い地点での合意を促し、地域の問題やコンフリクトを解消する可能性を示した。

本プロジェクトは、この桑子の社会的合意形成の試みの教育版である。桑子の談義の特徴は、表面的な政治的対立を超えて、地域についての深い価値観に哲学対話によって到達し、そこから改めて政治的イシューをクリエイティブに解決しようとするものである。しかし、桑子のプロジェクトの問題は、しばしば地域の人々が議論に不慣れであり、協働で何かを思考する経験に乏しい点である。この問題点を克服するためには、子どもの頃から、議論しながら考えるという体験が必要である。本プロジェクトは、こうした趣旨で行われた。実際に、「てつがく探検隊」は気仙沼、陸前高田、山田町のすべてで教育委員会の協力のもとで行われたが、地域の問題点を子どもたちが話し合うことはあっても、それが「偏向」として受けとられることは一度もなく、継続してこのプロジェクトを行ってほしいという申し出を受けている。哲学対話は、政治的ディベートとはまったく異なる。それは単純に是非を問う討論ではなく、対立の底にある自分たちの価値と来歴を明らかにし、その上で問題の新しい創造的な解決をもたらそうとする試みである。すべてのケースでうまくいくわけではもちろんないが、これまでの哲学対話の実績がその可能性を示唆している。

だが、ここで指摘すべきは、地域が政治的に分断（生産的な対抗ではなく）してしまうのは、より上位の権力、たとえば、国や県が、地域住民の意思とは別に、開発や施設設置などを「上から」行う場合が多いという事実である（飯田 2016；木下 2016；増田 2014）。そうした地域の自律性をないがしろにした計画が、しばしば地域を分断する最大の原因となっている。議論による地域の価値の見直しと来歴の確認こそが、地域の自律性を高める一歩となると思われる。

- ② 学校の教科の成績を重視し、「そんなことに時間を費やしていると成績が下がるのではないかと心配しがちな親や学校の先生に、こうした活動の重要性を認識してもらうためにどのような戦略が有効か？またそのためには、どのような情報を集めるべきか？

この質問は、本プロジェクトを学校内で行うことを想定したものと思われる。しかし、子どもの教育の場は、学校教育のみならず、家庭教育、社会教育の三つが存在する。沖縄、広島、宮崎では学校として哲学対話に取り組んでくれた場所もあるが、（これは今までの経験からどこでもそうであるが）そのときには成功しても、イベントのようにその場限りのものになってしまいがちである。今回、東北被災地域ではとくに図書館を中心的な実践の場として選んでいる。図書館を基地にした教育を行うのは、積極的な理由としては、東日本大震災後、中村や河野が被災地支援に赴いたときに強く印象を受けたことに、都会の図書館とは異なり、地方とくに過疎地での図書館はコミュニティセンターの役割を果たしていることが事実としてあったからである。山田町の例もそうであるが、近年、小さな地方公共団体では、図書館は市役所やコミュニティセンターと併設して作られることが多く、世代的に多様な人びとが図書館に集まってきており、ただの読書室とは違う地域のつながりの場となっている。現に、都会では考えられないほどの中学生高校生が図書館に集まり、交流している。気仙沼市では新図書館建設と並行した「てつがく探検隊」を実施して、教員委員会、図書館関係者、地域住民と子どもとともに関わりやすい場として図書館を利用することを企画した。これは図書館情報学を専門とする研究分担者、中村のアイデアでもある。

図書館を基地とした消極的な理由としては、本プロジェクトのような体験型の教育を行うのに、かならずしも学校という場が適していないことである。

周知のように、日本の学校は文科省のカリキュラムと教科書に強く縛られており、実験的な授業を行う時間的・人的な資源に乏しい。単純に言えば、地域体験学習を学校でやろうとすれば、丸一日、遠足のようなことになり、それを指導し、子どもを見守る教師たちの労力は大きく、予算も足りない（一学年100名いれば、大型バスが3台も必要となる）。また哲学対話をその人数に対して行うには、7～8名ものファシリテーターが必要となる（実際に沖縄ではそうなった）。こうした活動を学校の授業で恒常的に入れるには、総合的な学習の時間を完全にこちらが利用させてもらう以外になく、そこまで私たちが学校に常駐することもできず、また学校のカリキュラムの進行にもそぐわない。学校はある意味で閉鎖的な空間であり、地域の住民や保護者も部分的にしか教育参加できない。多世代対話という本プロジェクトの趣旨を実施しにくい空間なのである。

そして、学校の校長や教師たちがこうした活動に理解を十分に示してくれなければうまくいかないことは明らかである。こちらから声をかけられてはじめて学校を訪問したほうがよいというのが、これまでの実践経験から言えることである。上記の質問のとおり、教師や親が、一律に、こうした現代的な教育方法に興味を示すとは限らない。哲学対話を教科の一部に取り込んでいる学校も、東京や神奈川、宮城県の一部では存在するが、それはその学校や地域の全体の取り組みとしてはじめて成立している。研究者側から一方的に提案して働きかけて、そのような状態になることはない。今回ある被災地域では小学校側から声がかかり、哲学対話だけを実施した。成果は上々であり、子どもたちの良い反応をくれたが、その小学校の校長は、「こうしたアクティブラーニングがこれからの教育の中心になっていくはずなのに、なかなかこの先生たちにはそれが分かっていない」とおっしゃっていた。哲学対話を含めたアクティブラーニングは、都市部では真剣に導入の必要性が叫ばれているが、それに比べて、地方ではやや反応が鈍いかもしい。ここにも地方の教育の問題がある。しかしながら、これは直感でしかないが、比較的若い保護者は地方であっても、こうした活動に好意的な人が多いという印象を持っている。

このタイプの地域創生教育を行うには、少人数で実施する必要がある。今回の東北被災地での実践では、最少催行人数が5名、最大を15名程度とした。それを超えると体験型教育は困難になり、また環境負荷も大きくなる（今回、体験学習を行った自然の豊かな地域に、学校の1学年全員が踏み入れれば、壊滅的な環境破壊となる）。対話もそこに多世代の人びと（大学生や保護者世代など）が入ると、一グループで行う限界に近くなる。グループが大きいと、話をするのが苦手な子どもは対話を尻込みする傾向が出る。「子どもてつがく探検隊」はそもそも人数を限定した教育を想定しているのである。

最終的に地域を創生する人材を育成するのに、学校の一斉授業で、内容の薄い、体験に欠けた教育を行う必要はないというのが、私たちの最初からの考えである。また教育の評価に関しても、従来の学校での授業評価よりも、本プロジェクトが採用すべきなのは、「真性の評価」である。リアルで子どもにとって親密な真性の文脈において、途中の過程に重きをおいて、教育成果を評価する必要がある。この考えは、気仙沼や陸前高田では理解され、図書館をそうした実践の場として使うことは歓迎され、教育委員会からはスポーツ少年団や地域の少年組織に声をかけてもらった。もちろん参加してくる子どもの親は、こうした活動に理解があり、自発性の高い子どもの集団において実施することが有効であると思われる。

- ③ 子供に興味をもってもらうためにはどのような方法が有効か？視聴覚教材の使い方、視察や実験の組み合わせ方、個人指導か集団学習か、ディベート方式か、どの程度の頻度で何回行うのが良いか？また子供の適性に応じたやり方は効果的か？そうだとするとどのような適性に注目すべきか？

この質問も、学校での一斉授業における教育を想定しているように思われる。地域の価値と問題点を知るには、桑子の実践においてもそうであったように体験がいちばん大切である。視聴覚教材など

は振り返りのときに、自分たちで録画したり写生したりしたものを利用するのは良いとしても、出来合いの教材では真の感動を得られない。ここで本プロジェクトがモデルとしているのは、ノーステキサス大学 (University of North Texas: UNT) の環境学部哲学科で行われている環境学習ツアーである。

このプログラムの目的は、生物圏保護地区において研究調査の方法を実地に学ぶとともに、生物文化多様性の倫理的な重要性を理解し、その価値を推進するフィールド環境哲学を身につけることにある。具体的には、自然公園内にキャンプし、それぞれの専門家の指導のもとで、周辺の植物と蘚苔の植生、昆虫類、鳥類、哺乳類の生息の観察と調査を行う。これらの観察と調査を踏まえて、自分たちが体験したことを論文で確かめ、ディスカッションするというものである。ここで、重要なのが「生物文化多様性」の概念である。人間の生活は生態系の一部であり、生態系なくしては人間は生存できず、人間の活動は大きく生態系を変化させる。人間の文化が多様であるのは、生命と生態系が多様だからである。人間の文化は、生命と生態系の多様性に奉仕するものでなければならない。その生物多様性によって人間の文化も豊かになる。プログラムの目的は、生態系とそこに生きる文化が多様であることの重要性を理解することにある。

この UNT のプログラムは、もとより大学生・院生を対象としたものである。しかし、内容を小中学生に合わせて、相似したプログラムを行うことは可能であると思われたため、本プログラムで実施した。その際に大切だったのが、環境教育の専門家である奇二正彦氏に自然フィールドワークのガイドを行ってもらったことや、それぞれの地域で、その地域の環境と文化を紹介できるゲスト講師を呼ぶことができた点である。日本の子どもたち、とくに地方の子どもたちほど、こうした体験学習をする機会が少ないといえるだろう。私たちは、この地域の自然文化体験（生物文化多様性の経験）の少なさが、地域衰退の大きな原因の一つになっていると考えている。

また、ディベートと哲学対話はまったく異なるものであり、こうした学習のためには哲学対話が優れている。ディベートは意思決定のための手段である。この点については代表者、河野の著作 (2014) や翻訳書を参照していただきたい。あわせて、河野が監修した NHK E テレの子供番組「Q～子どものための哲学」を視聴していただきたい (ウェブで閲覧可能)。

個人指導か集団学習かという問いも従来の学校教育を想定した質問に思われる。私たちがめざしているのは地域創生である。したがって、地域に住む子どもたちが、地域を外部に開きながら、そこにおいて持続可能であり、ある持続的に発展できる共同体と自然環境を形成していくことが、その最終的な目的となる。このプロジェクトの計画書でも説明したように、これは一種の開発教育である。開発教育においては、個人の能力を従来の学校教育のように測定する、その効果を証するような教育を行わない。

「開発教育」とは、開発教育協会の定義によれば、「開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動」である。開発教育は、もともとは開発途上国を対象とした教育活動であるが、特定の場所に限られものではない。地域支援の問題の根幹が教育にあるとの認識に立ち、地域の開発とその地域の教育は一体化したものとして実施されるべきだとの立場に立つ。開発教育とは、ある地域の住民に工業化するための技術を教えることではない。それは、自らと地域と世界とのつながりを認識し、公正で持続可能な地球社会づくりに参加するための教育学習活動である。その教育は、地域住民と開発支援する側も含めたあらゆる人を対象としている。この枠組で考えたときには、子どもの個性や適正を伸ばすというようなことも、近代的で個人主義的な教育観を反映させた考えに陥りがちであり、開発教育の最終的な目標からは少し外れた目標設定と言わざるを得ない。

本プロジェクトが求める学びにおいて必要とされるのは、学校の授業で受け身に情報や知識を得て、それをテストで想起するという性質の教育ではない。そうではなく、当事者として自分の地域の諸課題にどのような姿勢で臨み、どのような共同体を作り出し、人間と自然との持続可能な関係をどのように構築するのかといった、生涯にわたって問い続けるべき態度や姿勢を育成するための教育である。

そこでは、学びの主体としての市民、変革の主体としての地域住民という気づきを出発点とした主体性や自主性が重んじられる。

実施回数について言うならば、開発教育は、あらゆる学校教育に先んじて行われるべきであると主張したいが、現在の日本では現実的ではない。実際には、子どもてつがく探検隊を実施するのに、これまで現地の教育委員会や図書館、子どもたちの都合と、私たちの実施能力をすり合わせた結果、四半期に一回というのが限界と思われる。しかし1日だけでこの教育活動を行うには、時間が短く、効果も限定的である。そこで、2～3日のサマーキャンプなどの形式が可能かどうかを現在、検討している最中である。

④ 将来的には、どのような場で定着させることを目指し、そのような人材育成を行っていくのか？

上記③の回答と重複するが、時間をかけて少人数の教育を地道に行っていくのが、地方創生にとって一番良いのではないかと判断される。今年度では、地域の価値の再発見が中心となり、地域創生のためのプランづくりは、広島や宮崎での実践で行われたが、東北被災地ではそこまでの段階に至らなかった。対象が小学生と中学生であり、参加者が安定しないこともあったが、他方で、段階を焦るのは拙速をもたらし、子どもの関心を失うことになるだろう。

今後は、東北被災地においても、図書館と大学サテライトを中心にすることは継続するが、他方で、もう少し学校と連携し、上に述べたサマーキャンプや課外授業として実施していくことも視野に入れる予定である。しかし、上記の理由から通常の授業への導入は、むしろ教育効果を削ぐものと考えている。自発的に参加を希望する子どもと理解ある保護者に対して、他地域で事業創生や地域おこし、NPOなどに積極的に参画している若年層（たとえば、沖縄の高校生起業家、仲田氏など）を招聘して、モデルを示してもらおう予定でいる。

宮崎での実践はかなり発展的な段階にあり、広島・沖縄でも次の段階に進んでよい時期になっていると思われる。

3-4. 実施項目毎の結果・成果の詳細

3-4-1. (東日本大震災被災地域での「地方創生教育」)

【結果・成果】

- 1) 「研究開発面」として
 - ・ プロジェクトを考案、実施することができた。
＜「地域フィールドワーク」と「哲学対話」による価値の創生＞を行うために、「地域フィールドワーク」と「哲学対話」を組み合わせた教育プロジェクト「子どもてつがく探検隊」を考案、実施することができた。
 - ・ 子どもたちが、地域についての気づきや学びを得るプログラムをデザインすることができた。
「地域フィールドワーク」では、子どもに本物の自然と文化に直接に触れる感動と、地域についての気づきや学びをもたらすことに成功した。
 - ・ 子どもたちと地域の内外の人たちが地域課題の解決に向けて共に考え、学び、活動する機会をつくることができた。
「哲学対話」では、体験をメタ的に反省する非常に充実したやりとりになり、同伴した大人との関係性が深まった。また、地域の内外の大学生がプロジェクトに関わることにより、東北で暮らす人と首都圏で暮らす人の考えの前提に違いがあることが認識された。さらに、首都圏で暮らす大学生の視点・発言が「地元の人の前提を問う」ことにつながり、より、その地域の特性や課題を明確化することができた。それらにより、持続可能な地域としてあるべき姿や、自分たちの未来の生活について活発な議論をすることができた。
 - 2) 「社会実装面」として
 - ・ 地域の教育関係者の理解を得ることができた。
東北地方での「子どもてつがく探検隊」の活動は、回数を重ねるごとに、その重要性を図書館員、教育委員会、市職員、教員らにも実感してもらうことができた。気仙沼の教育委員会と図書館による協力は格別であり、地域のリーダーシップ養成のための少年団の企画に入り込むことができ、7月には1泊の自然体験キャンプと哲学対話、図書館での調査を含めた理想的な教育プロジェクトを実行することができた。
 - ・ 地域で暮らす人々の関与を引き出すことができた。
子どもからの反響もとても良く、地域の人々のさらなる関与を引き出すことができた。また、地域で、その土地特有の活動をする方々を巻き込み、ワークショップの講師を務めるといった協力を得ることができた。
 - ・ メディアに取り上げられた。
岩手新報社や共同通信社などをはじめとしてメディアからの取材をしばしば受けた。
 - ・ 学校での実践をすることができた。
陸前高田では岩手大・立教大のグローバルキャンパスと連携が深まり、山田町では町立図書館と県立図書館の支援、さらに地域小学校からの要請で、29年8月には学校でも実践することになった。
- 【気づきや、新たに発見・判明した課題など】
- ・ プログラムデザイン及びファシリテーターの選定の重要性
環境体験については、実施場所およびガイド役（ファシリテーター）がきわめて重要であり、その選定を確実にを行うことで、知識と直接体験の相互作用が深い学習をもたらすことがわかった。

だが、そのためには環境教育の専門家の協力を得て事前調査を行う必要があること、現地にて実際に事前調査を行うための時間や資金を確保しておく必要があることがわかった。

・現地の教育や行政、産業の関係者と強い協力関係を築く必要性

地方創生教育を各地域に根付かせるためには、それぞれの地域で、現地の教育や行政、産業の関係者と強い協力関係を築くことが必要である。とくに学校を中心とする学びの場を確保することは、この活動を多世代共創的かつ持続可能的にするうえできわめて重要であることがわかった。ただし、これらは、一足飛びには達成されず、時間をかけ関係を築いていくことが重要である。実際、昨期からの活動によって、気仙沼、山田町、宮崎五ヶ瀬・高千穂地域では学校関係者と強力な関係を構築することができた。他方、陸前高田市、竹原市、いわき市、四万十地域では地域関係者から支援と協力を受けているが、まだ学校の中には十分に入り込めていないことが、今後の課題である。

・学びの場での教育活動を地域への課題へ広げる方法の必要性

学びの場での教育活動を地域への課題へといかにして広げるかについてはまだ方法論が確立できておらず、その開発に課題が残る。環境体験などの体験学習と哲学対話を展開しながら、将来的に地域創生を担う人づくりへとつなげていくためには、地域の協力者とより親密に対話し、共同してその方法を模索していく必要がある。

3-4-2. (プロトタイプ実施)

【結果・成果】

1) 「研究開発面」として

・その地域において哲学対話の教育的意義と効果を実感してもらうことができた。

プロトタイプ実施では、その地域において哲学対話の教育的意義と効果を実感してもらうことに重きをおいた。寺田は、東京近郊の小学校（28.10～29.3）で、持続可能な発展をテーマとした哲学対話を試み、小学生も哲学的に粘り強く議論し、メタ対話的な反省もできることを示した。また、就労に困難のある青年向けのトレーニングに哲学的対話を組み込み、自己表現し議論し反省的に考えることにより成果向上することを示した。さらに、寺田は、地元からの要請に応じて広島県竹原市の小学校で地域哲学対話を実施した（29.2）。

梶谷は、宮崎県五ヶ瀬・高千穂地域の中高で生徒と地域住民と哲学対話を行い、ファシリテーションの仕方、各生徒の話す・書く力を伸ばす実践講座を開催した。

梶谷と河野は、沖縄の女子高生で起業家の仲田洋子氏を交えて、沖縄でキャリア形成に関わる対談と哲学対話（29.2-3）を行った。

河野は、琉球新報社における子ども哲学カフェとファシリテーション講座、ジュンク堂書店での哲学カフェ、前田ユブシが丘児童センター、比屋根小、室川小で哲学対話を実施した（29.2）。

直江は、東北大学災害科学国際研究所が交流してきた福島県いわき市・双葉郡で、地域の魅力や人材育成と教育などをテーマとした約10回（28.10～29.8）の哲学対話を行った。

2) 「社会実装面」として

・宮崎、沖縄、東京近郊、福島での学校における哲学対話を軌道に乗せることができた。

各地の学校での実践を試行した。その結果、宮崎、沖縄、東京近郊、福島での学校における哲学対話も軌道に乗りせることができた。また、地域創生をテーマとした内容や体験学習と結びつけ展開することが可能な段階となった。

【気づきや、新たに発見・判明した課題など】

・地域が抱えるコンフリクトに相對する重要性および必要性

東京近郊では各地域の実態や具体的問題に踏み込むために地域で活動している人々や団体と連携して、子どもと大人の世代を超えた経験の共有と哲学的な対話を実施することができた。その過程で、「地域が抱えるコンフリクトにどう相對するか」という課題が出てきた。哲学対話により、各地域が抱える隠された対立（被災、避難、基地、開発）が、亀裂を深めたり、新たな対立をもたらしたりする可能性がある。しかし他方、それらの問題を避けて通っては真の地域創生には繋がらず、地域の将来を担う人づくりにも貢献しない。今後、桑子敏雄が行ってきた「談義」にモデルを見出し、地域の価値観を哲学的レベルで問い直し、深い合意を作り出すための対話の方法と創造的な問題解決を学ぶ合意形成教育を目指す必要がある。

・五ヶ瀬中等教育学校による地域住民との交流

当初の期待通り、高校生たちは地域の人たちと打ち解け、将来の五ヶ瀬がどうなるといいのか、そのために各自に何ができるのか率直に話し合った。それは双方にとって、ただ頭の中で抽象的に考えているだけではなく、具体的にどういう希望があり、何ができるのかを明確にする初めての機会となった。今回は、高校生たち自身が企画したとのことで、彼らが自ら対話の技法を地域交流に活かしてくれたこと、その企画・進行から彼らの著しい成長ぶりがうかがえたとし、それが地元の人にも十二分に伝わっていた。どちらかがどちらかのために一方的に働くのでもなければ、双方別々に活動するのでもなく、協同して活動していく素地ができたのではないかと思う（それについては今後の経過を見ていく必要がある）。

またこのような五ヶ瀬中等教育学校の取り組みは、SGH と結びついていることが前提となっている。これは一方では、だからこそきちんと発展していったと言えるが、他方では、SGH の期間が終了した後どこまで継続できるかが焦点となるだろう。とはいえ、ある程度楽観できるのは、五ヶ瀬中等教育学校自体が、もともと地域振興のために作られ、いわゆる偏差値の高い大学への進学率の向上を目指すのではなく、地域（少なくとも宮崎）に貢献できる人材を養成することを目標としている。したがって、そこに哲学対話がうまく組み込まれれば、それが地域振興に継続的に活用されると思われる。ただしそのためには、おそらく SGH 終了後は私が講習に行く費用を別の形で調達しなければ、私が行くことはできなくなり、梶谷氏なしで自律的にやっていたのかは不透明である。そのための対策として、現地の教員や NPO グローカルアカデミーのスタッフに対する研修も今年から行うようになった。これによって地元で哲学対話の講習が定着すれば、自立した循環ができ、持続的なものになるだろう。

・高千穂高校 GIAHS アカデミーの活動支援

高千穂については、世界農業遺産というその地域に共通する財産・テーマができたことが活動全体の土台となっている。これを機に宮崎県教育委員会、宮崎大学、高千穂町町役場と高千穂高校が連携していく枠組みができた。本プロジェクトでは、この連携組織の立ち上げに関わったこと、その直後から高校や教員への哲学対話講習と文章の書き方講座を行うことができた。哲学対話そのものもそうだが、文章講座も根本においては似たスタイルを取っているため、この対話や文章作りの時間自体が多世代の交流の場となりえるので、様々なアレンジをして地域づくりに生かせるはずである。

ただし一つ課題となるのは、大学の関わり方である。梶谷氏が頻繁には来られないこともあり、地元の大学と高校、自治体が協力し合うことが重要であるが、今のところ大学からの関わりはまだあまり多いとは言えないし、私自身一度関連部署を訪ねて、話をしただけでそれ以上のつながりはできなかった。連携組織ができただけでは、まだ不十分で、それをいかに実質的なものにしていくかが問題であろう。その点でも NPO 法人グローカルアカデミーの存在は大きい。代表の

田阪真之介氏は宮崎大学で講師もしており、この連携組織の結びつきを強化し、発展させていくのも、彼らの活躍にかかっていると見える。

さらに特筆すべき成果として、2月に行った高千穂高校の哲学対話講習は、地元の人も参加したものであったが、この時の様子を10分程度の動画に編集した。昨今は映っている人のプライバシーを尊重して顔が分からないようにする措置が取られるが、このときはむしろ逆に高校生たちの表情が見えるように、わざわざ誰が映っているのか分かるようにした。その結果、3月の連携組織の立ち上げイベントの時、地元の高齢者は自分たちの知っている子供が出ていることに歓喜し、見入っていたという。そしてNHKエデュケーショナルが高千穂の世界農業遺産のドキュメンタリーを制作することになったとき、この動画に映っていた生徒たちに出演依頼が来たのは、顔が見えるように動画を作った成果であるといえる。このように地方では匿名よりも「人の顔が見える」ほうがアピールすることが分かった。こうした手法は今後も様々な機械に使えるはずである。ちなみにこのドキュメンタリーは以下のリンク先で見ることができる。

*動画「世界農業遺産 高千穂郷・椎葉山地域 ショートドキュメンタリームービー」

https://www.youtube.com/watch?v=imY_kXWQenY

・沖縄那覇市における高校生のキャリア意識の育成

沖縄では、現地の協力者が、若者のキャリア支援を行う高校生起業家の仲田洋子氏あったこともあり、もっぱら高校生がターゲットとなった。そこで彼女が以前通っていた塾、グレイトヴォヤージュを会場として提供していただいた。またこの予備校じたい、代表の大岩光昭氏の方針で、ただ勉強を教えるだけでなく、予備校生とは大学入学後も関わりをもち、様々な地域貢献も行っている。このプロジェクト期間中には2回ほど哲学対話を高校生（大半がグレイトヴォヤージュの予備校生）と行った。その際テーマも、学校での勉強と将来への展望を考えてもらうきっかけになるようにした（「なぜ学校へ通うのか？」と「将来これだけはしたくないことは何か？」）。これによってどの程度彼らのキャリア意識に変化が起きたかは定かではない。だが、2回目のイベントの時に、地元でうつ病の人の支援をしている組織の人が参加し、私とつながりができたのは、大きな副産物であった。彼らうつ病の人が社会復帰するためのリハビリに有効なのではないかと関心を持ってくれた。

ここでは若者の将来、進路というのが共通のテーマとなっており、そこに仲田氏とグレイトヴォヤージュの大岩氏の活動も位置づけられる。受験勉強というのは、とかく社会から切り離されがちであるが、二人のユニークなスタンスのおかげで、そこからむしろ社会に開かれていくのは、教育を軸にした地域振興を考える上でも大きなヒントになるだろう。ただし、来年には仲田氏が高校を卒業し、おそらく沖縄を離れることになる。今後の彼女がどのような活動をするかによるが、彼女がいなくなることがどういう影響を及ぼすかはまだ不明である。ただ大岩氏とのつながりもできたので、彼と協力することで、さらなる展開は可能だと考えている。

・持続可能な開発のための教育(ESD)における哲学対話

小学校のESD教育において、哲学対話を活用することは次の諸点において極めて重要であることが検証された。ESDで学んだことの意味をさらに深めること、ESDで身につけたコミュニケーション能力をさらに伸ばさせESDに還元すること、地域住民との学習会で哲学対話の手法を活用することができること、などである。また、小学生が通常の哲学対話に参加することができるだけでなく、哲学対話に関するメタ認知をもちうるということが判明したことは、大きな成果である。

・広島県竹原市における地域フィールドワークと哲学対話

地域の問題を考えるためにフィールドワークと哲学対話を組み合わせることが有効であることが検証された。フィールドワークでは地域住民にも慣れ親しんだ地域について新しい発見があり、

それをもちよって「よい町とは何か」「地域の歴史を知ることの意味は何か」などの哲学的な問いを問うことによって、地域が抱える問題をより深く考えることができる。また、哲学対話に他の地域の住民が参加することの有効性が検証された。ただし、対話の場を設定すること自体の難しさ、「哲学」の名を冠することの是非については検討の余地がある。

・広島県呉市・竹原市の学校における哲学対話

これまで哲学対話に触れたことのない子どもたちが哲学対話に一定以上の関心をもつこと、適切な場を用意すれば哲学対話に参加しそれを楽しむことが判明した。その適切な場のつくり方、問の選定の仕方などについて貴重な知見を得た。また、地方において小学校を拠点にして地域のことを考える親子哲学対話、地域哲学対話開く手法について貴重な知見を得た。

・東京における市民のための哲学対話

すでに市民のための対話の場として確立している哲学カフェが、地域の問題を考えるための場としても機能することが検証された。各地域のコミュニティ・スペースなどで地域を考えるために哲学カフェの手法を活用することは有益である。

・東京近郊の学校における哲学対話

これまで哲学対話に触れたことのない高等学校生徒の年齢の若者たちが哲学対話に一定以上の関心をもつこと、適切な場を用意すれば哲学対話に参加しそれを楽しむことができることが判明した。その適切な場のつくり方、問の選定の仕方などについて貴重な知見を得た。

・東京近郊の若者の就労支援機関における哲学対話

以前に哲学対話に触れたことのない若者たちが哲学対話に一定以上の関心をもつこと、適切な場を用意すれば哲学対話に参加しそれを楽しむこと、哲学対話によって自身が抱える問題を克服するきっかけをつかむことができることが判明した。その適切な場のつくり方、問の選定の仕方などについて貴重な知見を得た。

・京都の寺院における哲学対話の実施

地方における哲学対話に対するニーズの存在、寺院固有の哲学対話の場としての可能性、寺院が地域の問題を考えるためのコミュニティ・スペースとして機能する可能性について新たな知見を得た。

・福島県いわき市での哲学対話実施

いわき市では2箇所学校以外の場において対話プロジェクトを行った。いずれも狭い地域で日々親ともども顔を合わせている人間関係の対話であったため、テーマの選択と事前の準備が重要であった。今回は、防災教育と組み合わせて対話プロジェクトを開催したため、防災の話を深め、地域と関連付けることが可能であった。こうした組み合わせは、地域づくりには有益であると推察される。

いわき市ではとくに多学年での対話を重点的に試みた。狭い社会であるもののふだんの付き合いは昔のように濃厚なものではない。対話を通じて上級生が下級生に配慮してなるべく経験に基づいた具体的に話をするよう自発的にするなど、回数を重ねることで多学年での交流に進捗が見られるようになった。また、いわき市でも大人を交えた対話を提案し、地域組織と話し合いを重ねた。しかし、震災以降、復興をめぐる地域内での深刻な対立を経験してきたこともあり、直接に地域の将来について話ことには拒否感が感じられた。このため、まずは子どもから回数を重ねることにしたが、研究期間の都合もあり、多世代での対話ができただけであった。

檜葉町では教育委員会を通じて本事業の実施を検討してきたが、本期間中の実施は見送られた。被災地の学校においては、外部の人の出入りが激しく、これまでの様々なプロジェクトで疲弊したことがあり、時期を慎重に見極める必要があったためである。対話プロジェクトの実施にあたっては、地域の実情に合わせて時期、導入法を検討する必要がある。

3-5. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

本プロジェクトの成果を踏まえ、今後の展開に関して触れる。

まず、中・長期的な効果や展開に関しては、これは今までに述べた通り、学びの場の地域での継続・発展を目指すと共に、そして子どもら自身による後進への「哲学対話」の手法の教授が可能性として考えられる。都内での事例と同様の多世代哲学対話は、被災地では3年、5年後を見据えたものとなる。地域の協力者との連携を確たるものとし、子どもらが大人と地域の課題と今後も向き合い続けるためにも、その手法を子どもたち自身がその後の世代へ継承していくための体制の構築が考えられる。

その実証地域・研究領域の枠を超えて普及・定着が可能な成果は「地方創生教育」と「プロトタイプ」、両グループの実践において示されている。本教育実践は確かに地域が抱えるコンフリクトに相対するための柔軟性、変動性を要求するが、公教育の場においては学校関係者、そして図書館との連携において、場や機会を変えつつ共通の構造が適用可能だったことからその汎用性が理解できる。そうした汎用性及び適用可能性からも、本教育実践における全ての事例がその根拠と実例足りうるの言うまでもないことである。だが、こうした汎用性の中で運用する際には、子どもらが「よそのもの」や「大人」の目を意識しすぎることで「学校的な部分」が顕在化しかねないことは意識しなくてはならない。規範的或いは倫理的な見解は確か一面では正しいが、それは学校において要求される回答であり、自身の経験と結びつけられた「哲学対話」としてのものとは言い難い。子どもらにどの様に経験を言語化させるか、他者の経験をそれはそれとして提示させるかが、今後養成されるであろうファシリテーターには期待される。

また、そのプロジェクト関与者間でのネットワーク構築として、「地方創生教育」グループにおける参加者と企画者、それぞれのネットワーク構築を実行、或いは想定している。参加者のものとしては、「哲学対話」参加者が一堂に集まる場の設定を考えている。地域内外の情報リソースや類似した体験の当事者は大人だけではなく、同プロジェクトに参加する自分の地域外の子どもにも適用される。大人と地域の課題解決への対話へと移行する前の関与者間で「対話」するためのネットワークを構築することは有意である。企画者に関しても同様のことであり、例えば岩手県立図書館と山田町立図書館においては視察を行うことを通して図書館を場とした「哲学対話」の事例の収集と認識の共有を図っている。

最後に、本教育実践研究が目指す地方創生教育を各地域に根付かせるためには、以下のような課題がある。第一に、それぞれの地域で、現地の教育や行政、産業の関係者と強い協力関係を築くことである。とくに学校を中心とする学びの場を確保することは、この活動を多世代共創的かつ持続可能にするうえできわめて重要である。昨期からの活動によって、気仙沼、山田町、宮崎五ヶ瀬・高千穂地域では学校関係者と強力な関係を構築することができた。今後は正課授業のなかでの実施を検討する。他方、陸前高田市、竹原市、いわき市、四万十地域では地域の関係者から支援と協力を受けているが、まだ学校の中には十分に入り込めていないことが、今後の課題である。第二に、学びの場での教育活動を地域への課題へといかにして広げるかである。体験学習と哲学対話を展開しながら、将来的に地域創生を担う人づくりへとつなげていくためには、地域の協力者とより親密に対話し、共同してその方法を模索し開拓していく必要がある。東京近郊では各地域の実態や具体的問題に踏み込むために地域で活動している人々や団体と連携して、子どもと大人の世代を超えた経験の共有と哲学的な対話を実施する段階に来ている。第三の課題として、地域が抱えるコンフリクトにどう相対するかである。各地域が抱える隠された対立（被災、避難、基地、開発）が哲学対話によって亀裂を深めたり、新たな対立をもたらしたりする可能性は本プロジェクトの懸念材料である。しかし他方、それらの問題を避けて通っては真の地域創生には繋がらず、地域の将来を担う人づくりにも貢献しない。本プロジェクトでは、桑子敏雄が行ってきた「談義」にモデルを見出し、地域の価値観を哲学的レベルで問い直し、深い合意を作り出すための対話の方法と創造的な問題解決を学ぶ合意形成教育を目指す。

4. 研究開発の実施体制

4-1. 研究開発実施者

(1) 東日本大震災被災地域での「地方創生教育」グループ（リーダー氏名：河野哲也）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
河野 哲也	コウノテツヤ	立教大学	文学部	教授
中村 百合子	ナカムラユリコ	立教大学	文学部	教授
宇佐美 公生	ウサミコウセイ	岩手大学	教育学部	教授
永井 玲衣	ナガイレイ	立教大学	文学部	RA

(2) プロトタイプ実施グループ（リーダー氏名：梶谷真司）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
梶谷 真司	カジタニシンジ	東京大学大学院	総合文化研究科	教授
直江 清隆	ナオエキョウカ	東北大学大学院	文学研究科	教授
寺田 俊郎	テラダトシロウ	上智大学	文学部	教授
河野 哲也	コウノテツヤ	立教大学	文学部	教授

4-2. 研究開発の協力者・関与者

氏名	フリガナ	所属	役職	協力内容
井尻貴子	イジリタカコ	NPO 法人こども哲学おとな哲学アーダーダ	理事	被災地域、沖縄での実践の協力、実践参加
五味壮平	ゴミノウヘイ	岩手大学人文社会科学部	教授	岩手県での実践における紹介、機会提供、実践参加
工藤良裕	クドウヨシヒロ	岩手県立図書館	館長	岩手県図書館での実践における助言、広報
澤口祐子	サワグチュウコ	岩手県立図書館	主任行政専門員	岩手県図書館での実践における助言、広報
千田基嗣	チダモツツグ	気仙沼市本吉図書館	館長	本吉図書館での実践における助言、広報
柳瀬寛夫	ヤナセヒロオ	株式会社岡田新一設計事務	取締役社長	宮城県気仙沼における実践への助言、紹介

		所		
奇二正彦	キジマサヒコ	NPO 法人生態教育センター	主任指導員	東北被災地での環境教育実践への協力、実践参加
道又純	ミチマタジュン	山田町観光協会		東北被災地での環境教育実践への協力、実践参加
武蔵裕子	ムトウユウコ	気仙大工伝承館	館長	東北被災地での環境教育実践への協力、実践参加
高橋裕幸	タカハシユキヒロ	岩手日報社販売局企画出版部	専任部長	岩手県における実践への助言、紹介、広報
潮平芳和	セヒラヨシカズ	琉球新報	編集局長	沖縄での実践における助言、紹介、機会提供
仲田洋子	ナカダヨウコ	株式会社カッシーニ	取締役社長	沖縄での実践における助言、紹介、機会提供
白井一郎	シライイチロウ	一般社団法人（非営利型）子どもの成長と環境を考える会	代表	東京近郊での実践における紹介、機会提供、実践参加
村瀬智之	ムラセトモユキ	国立東京工業高等専門学校	准教授	被災地域、東京、沖縄での実践の協力、実戦参加
松本行真	マツモトミチマサ	東北大学災害科学国際研究所	准教授	仙台・福島での実践における紹介、機会提供、実践参加
久利美和	クリミワ	東北大学災害科学国際研究所	講師	仙台・福島での実践における紹介、機会提供、実践参加
西村高宏	ニシムラタカヒロ	福井大学医学部	教授	仙台・福島での実践における紹介、機会提供、実践参加
近田真美子	コシダマミコ	福井医療大学	講師	仙台・福島での実践における紹介、機会提供、実践参加
辻明典	ツジアキノリ	福島県立相馬養護学校	教諭	仙台・福島での実践における紹介、機会提供、実践参加
小川泰治	オガワタイジ	国立東京工業高等専門学校	非常勤講師	広島、東京近郊での実践の協力、実践参加
小正和彦	コマサカズヒコ	横浜市立幸ヶ谷小学校	校長	東京近郊での実践における紹介、機会提供、実践参加
山崎利文	ヤマザキトシフミ	高知工業高等専門学校	教授	高知県での実践の協力、実践参加
原田涼	ハラダリョウ	四万十市富山		高知県での実践の協力、実践参加

		地区地域おこし隊		
田阪真之介	タサカシンノスケ	NPO 法人グロ ーカルアカデ ミー	代表	宮崎での活動のコーディネート統 括
茨木いずみ	イバラギイズミ	NPO 法人グロ ーカルアカデ ミー	事務局長	宮崎での活動のコーディネート実 務
上水陽一	カミミズヨウイチ	宮崎県立五ヶ 瀬中等教育学 校	教員	高千穂・五ヶ瀬地域での教員間の連 絡・組織
大岩光昭	オオイワミツアキ	予備校・グレイ トヴォヤージ ュ	社長	沖縄での活動の協力者
古賀裕也	コガユウヤ	お茶の水女子 大学附属高校	講師	哲学対話ファシリテーション
小正和彦	コマサカズヒコ	横浜市立幸ヶ 谷小学校	校長	哲学対話の実施協力
(任意団体) カ フェフィロ	カフェフィロ			哲学対話の実施協力
(公益社団法 人) ソシエトス	ソシエトス			哲学対話の実施協力
(NPO 法人) 育て上げネッ ト	ソダテアゲネット			哲学対話の実施協力
東京都立武蔵 高等学校				哲学対話の実施協力
(宗教法人) 妙 満寺	ミョウマンジ			哲学対話の実施協力
呉市立豊小学 校	クレシリツユタカ ショウガッコウ			哲学対話の実施協力
竹原市立大乘 小学校	タケハラシリツオ オノリショウガッ コウ			哲学対話の実施協力

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

5-1-1. 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント

無し

5-1-2. 研究開発の一環として実施したイベント

年月日	名称	場所	概要・反響など	参加人数
H28/10/24, 31,11/14,1 1/28,12/12	持続可能な開発 のための教育に おける哲学対話	神奈川県市 立幸ヶ谷小 学校	小学校の地域と連携した教育に おける哲学対話の適切な活用方 法の開発	小学校5年 生40名、6 年生40名
H28/10/30	気仙沼てつがく 探検隊	気仙沼中央 公民館 気仙沼図書 館	子ども向けのプログラム「気仙沼 てつがく探検隊」を実施した。午 前中は、気仙沼図書館周辺の植物 や生き物を観察、採集し、環境フ ィールドワークを体験した。午後 、気仙沼中央公民館にて参加者 から挙げられた「どうしたら身近 なものに気づくようになる？」と いう問いで哲学対話を行った。活 動全体を振り返ったのち、参加者 はそれぞれ気になる疑問につい て気仙沼図書館で調べた。	約10名(小 中学生)
H28/11/19	哲学カフェ	東京都神田	都市部の市民が地域の問題を考 える場としての哲学対話の有効 性を検討した。そのために、東京 神田で「ふるさと」をテーマにし た市民のための哲学カフェを実 施した。	15名
H28/12/18	五ヶ瀬中等教育 学校の地元住民 との哲学対話	宮崎県五ヶ 瀬町・社会福 祉センター	「もし生まれ変わるなら、東京と 五ヶ瀬のどちらに生まれたいで すか？」をテーマに哲学対話を行 った。企画・運営振興のすべてが 生徒によるもので、これまで SGHで行ってきた哲学対話講習 の成果が、地域の人との話し合 いに生かされていた。	五ヶ瀬中等 教育学校の 生徒6人と 地元住民 15人を含 む24人
H28/12/23	哲学カフェ	岩手県立図 書館	岩手県立図書館にて哲学カフェ を開いた。「本当に頭が良いつ てどういうこと？」という問いで 哲学対話をした。	16名
H29/2/10	「哲学対話」を 実施します～答 えのない問いに 挑む、練習だ」	宮崎県高千 穂町町役場	2015年に高千穂・椎葉地域が世 界農業遺産に認定されたこと を受けて、宮崎大学と県の教育 委員会と高千穂高校が連携し て地域振興に取り組むことにな り、梶谷がアドバイザーとして そこに関わることになった。	県立高千穂 高校の生徒 36名と地 元住民6人 を含む計 45名

H29/02/23	GV スペシャル 「哲学対話」	沖縄県那覇市の予備校グレイトヴォヤージュ	沖縄の女子高生起業家・仲田洋子氏、沖縄の予備校グレイトヴォヤージュと共同で哲学対話を開催。「どうして学校を休んではいけないのか」をテーマに、学校と学びについて高校生と社会人で対話を行った。さらに、中高生向けのビジネスのコンサルティングもしてきた高校生に、高校生が考える地方でのキャリアについてインタビューをした。その後、立教大学の学生とキャリアに関する対話をした。その模様は『琉球新報』2017.2.24. 朝刊「高校生、教授と哲学対話」に掲載されている。	地元高校生22名、塾のスタッフ4名、計26名参加。
H29/02/24	哲学対話の授業	沖縄市立室川小学校	小学6年生を対象に哲学対話の授業をおこなった。『対話する哲学教室』の一部を教材として、嘘についての哲学対話を行った。その模様は『琉球新報』2017.2.25. 朝刊「「うそ」って何？室川小で「てつがくカフェ」」に掲載されている。	約50名(小学校6年生2クラス)
H29/02/24	哲学カフェ	浦添市立前田ユブシが丘センター	小学生が集まる社会教育施設で小学生向けの哲学カフェを開いた。『ふたりはともだち』の一節の読み聞かせをした後、哲学対話を行った。	7名(小学生)
H29/02/25, 26	哲学対話	広島県竹原市	地域の諸問題を考えるため、竹原市の二地区においてフィールドワークと哲学対話を実施した。	50名
H29/02/25	第3回 りゅうPON! てつがくカフェ	琉球新報社	琉球新報の小学生向けの新聞『りゅうPON!』の読者を対象とした哲学カフェを開いた。当日集まった参加者からテーマを募り、多数決で決めた「なぜダメと分かっているのにやってしまうのか」という問いで哲学対話をした。その模様は『琉球新報』2017.02.26 朝刊「答えは一つじゃないよ 親子40人がてつがくカフェ」に掲載されている。	親子40人
H29/02/25	哲学カフェ@ジ	ジュンク堂	ジュンク堂書店那覇店でのイベ	20名

	ユンク堂書店	書店那覇店	ントの一つとして哲学カフェを開いた。事前に宣伝した「基地問題」をテーマとして哲学対話を行った。	
H29/02/26	哲学対話のすすめかた（初心者向け・中級者向け）	琉球新報社	東京高専の村瀬准教授を講師に招き、哲学対話のファシリテーターを養成する講座を開いた。午前中の「初級者向け」では、日本で行われている哲学対話という活動の概要やその背景にある理論を説明したのち哲学対話の体験講座を行った。午後の「中級者向け」では質問ゲームなどを通してファシリテーションに関するスキルを確認した後、哲学対話の進行役を体験する講座を行った。	25名
H29/2/27	哲学対話の授業	広島県竹原市立大乘小学校	小学校を拠点として地域の諸問題を考えるため、哲学対話の授業を行った。	20名
H29/02/27	哲学対話の授業	沖縄市立比屋根小学校	小学6年生を対象に哲学対話の授業を行った。『対話する哲学教室』の一部を教材として、嘘についての哲学対話を行った。	約110名 (小学校6年生3クラス)
H29/3/4,10,18	就労支援機関における哲学対話	育て上げネット	NPO法人「育て上げネット」の研修として哲学対話を実施した。	約10名
H29/03/04	プレ哲学教室あーだこーだ	山田町立図書館	4月より開始した「てつがく探検隊」のイベントとして、図書館で哲学カフェを開いた。集まった参加者からテーマを募り「そもそもベンキョウってなに？」という問いで哲学対話をした。	6名
H29/03/05	子どもてつがく探検隊	気仙大工左官伝承館 箱根山テラス	子ども向けのプログラム「子どもてつがく探検隊」を実施した。午前中に気仙大工左官伝承館にて「気仙茶のワークショップ」を体験したのち、午後は箱根山テラスにて哲学対話を行った。哲学対話の問いは「昔の作り方より機械で作った方がいいのでは？」であった。	8名(小学生)
H29/3/16,21	哲学対話	都立武蔵高校	若者が地域の諸問題を考えるための哲学対話の活用方法の開発を行った。	約10名

H29/03/19	気仙沼てつがく探検隊	水山養殖場 九九鳴き浜 気仙沼中央公民館 気仙沼図書館	子ども向けのプログラム「気仙沼てつがく探検隊」を実施した。午前中は、水山養殖場にてNPO法人 森は海の恋人の島山信氏による環境ガイド、九九鳴き浜にて生態観察を体験した。午後、気仙沼中央公民館にて参加者から挙げられた「自然を感じるってどういうことか?」という問いで哲学対話を行った。活動全体を振り返ったのち、参加者はそれぞれ気になる疑問について気仙沼図書館で調べた。	約10名(小中高生)
H29/3/25	福島県いわき市でのプロトタイプ実践	福島県いわき市薄磯団地集会所	「楽しいとは何だろうか」をめぐる哲学対話。これまで防災教育を行ってきた枠組みを活かして、大学院生を中心に企画・運営、進行をして、この地区ではじめて哲学カフェを行った。	18人
H29/04/29	子どもてつがく探検隊 あ〜でもねえ こ〜でもねえ	山田町ふれあいセンター オランダ島	子ども向けのプログラム「子どもてつがく探検隊 あ〜でもねえ こ〜でもねえ」を実施した。午前中はオランダ島にて山田町観光協会の道又氏によるフィールドワークを体験した。午後は、その内容を受けて、山田町ふれあいセンターにて、参加者から出された「あの島に一人で住むことになったらどうだろう?住めるのかな?」という問いで哲学対話をした。	5名(小学生)
H29/04/30	哲学カフェ	岩手県立図書館	岩手県立図書館にて哲学カフェを開いた。テーマは「生きるとは?」で、当日集まった参加者から募った問いで哲学対話をした。	12名
H29/5/27	福島県いわき市でのプロトタイプ実践	福島県いわき市薄磯団地集会所	「妄想・想像・創造」をテーマに小学4年生から中学3年生の児童生徒を対象に対話プロジェクトを行った。学年差がある上級生と下級生との対話と互いの配慮のあり方が検討された。	10人
H29/06/03	「個人の再建からコミュニティの創生へ」	陸前高田グローバルキャンパス	陸前高田市被災市街地復興土地区画整理事業に関わっている村上毅彦氏の講演を聞いたのち、そ	33名(岩手大学学生)

			の内容を受けて岩手大学の学生と立教大学の学生で哲学対話を行った。復興、被災、地域、その他のテーマ別にグループを分け、それぞれ参加者から問いを募り、哲学対話を行った。	
H29/06/04	子どもてつがく探検隊	気仙大工左官伝承館 正徳寺 陸前高田グローバルキャンパス	子ども向けのプログラム「子どもてつがく探検隊」を実施した。午前中は、気仙大工左官伝承館にて、蔵造りを解説する展示物を見学しながら気仙大工についてのお話を聞き、気仙大工によって建てられた正徳寺の住職千葉氏のお話を聞いた。午後は、それを受けて家屋や道具の今と昔の違いという話題から、哲学対話を行った。	6名（小学生）
H29/6/10・11	GV スペシャル「哲学対話」第2弾	沖縄県那覇市の予備校グレイト・ヴォヤージュ	沖縄の女子高生起業家・仲田洋子氏、沖縄の予備校グレイトヴォヤージュと共同で哲学対話を開催。10日は服装をテーマに、11日は昔話「鶴の恩返し」を読んで対話を行った。	地元高校生14名、大人4名、スタッフ1名、計19名参加。
H29/6/17	福島県いわき市でのプロトタイプ実践	福島県いわき市薄磯修徳寺	いわき市平薄磯の寺院広間にて当該地域を訪れた都内女子大学の学生と「地域の定住する魅力」について対話を行い、非居住者の視点から地域について既存の魅力や定住へ向けた訴求力のある付加価値について意見が出された。対話ののち地域住民組織メンバーと大学生との対話内容について意見交換を行った。	10人
H29/06/24	第2回 子どもてつがく探検隊 あ～でもねえ こ～でもねえ	山田町ふれあいセンター 長崎Ⅱ遺跡 山田町立図書館	子ども向けのプログラム「第2回 子どもてつがく探検隊 あ～でもねえ こ～でもねえ」を実施した。午前中は町内にある長崎Ⅱ遺跡にて山田町生涯学習課の小野寺氏による「発掘された山田」フィールドワークを体験した。その後、山田町立図書館にて長崎Ⅱ遺跡の発掘調査の様態を解説してもらった。その内容を受けて大人と子どもでグループ分けをして	4名（小学生）

			哲学対話を行った。	
H29/06/25	哲学カフェ	岩手県立図書館	岩手県立図書館にて哲学カフェを開いた。テーマは「生きがい」で、当日集まった参加者から募った問いで哲学対話をした。	8名
H29/7/10	哲学対話の授業	広島県呉市立豊小学校、広島県竹原市立大乘小学校	小学校を拠点として地域の諸問題を考えるための哲学対話の授業を行った。	20名
H29/07/22-23	気仙沼てつがく探検隊	旧月立小学校 八瀬川 八瀬・森の学校	子ども向けのプログラム「気仙沼てつがく探検隊」を実施した。初日はまず、旧月立小学校に集合し、今回のフィールドワークの内容と関連のある資料の案内を気仙沼図書館の山口司書から案内を受けた。次に八瀬川に入って生き物を観察、採集して、小学校に戻って見たり触ったりした生き物の情報を調べた。さらに地元の食材を使って自分たちで夕食のカレーを作り、残り火で花炭作りを体験した。2日目の午前中にそれまでの内容を受けて、参加者から挙げられた問いで哲学対話を行った。その後、八瀬・森の学校にてそば打ち体験をした。	6名（小中高生）
H29/7/26,27	福島県いわき市でのプロトタイプ実践	福島県いわき市薄磯団地集会所	テーマをきめずに対話プロジェクトを行った。新たな参加者も含め、話を聞くことを学ぶことを目標とした。	20人
H29/7/29,30	哲学カフェ in 妙満寺	京都府妙満寺	地域のコミュニティスペースとしての寺院における哲学対話の有効性の検討をした。京都洛北妙満寺における市民のための哲学対話を実施した。	10名（スタッフ2名）
H29/8/3	GIAHS アカデミーキックオフ研修	五ヶ瀬町桑野下組生活改善センター	GIAHS アカデミーは、世界農業遺産をテーマとする少人数のアクティヴ・ラーニング型プログラムで、今回は、彼らの取材・発信活動の基礎となる文章の書き方講座を行った。テーマは「夏休みの予定」	高校生 10名、教員 1名、他 7名、計 18名参加。
H29/8/4	教員向け文章の	高千穂町町	高千穂・五ヶ瀬地域の高校の教員	教員 4名、

	書き方講座研修	役場	のために書き方講座を行った。テーマは「ふるさと」で、実際の体験と学校での指導法について研修を行った。	その他 5名、計 9名参加。
H29/8/16-17	福島県いわき市でのプロトタイプ実践	福島県いわき市薄磯団地集会所	「現実とフィクションの違い」「いわきのよいところ」をテーマに対話を通じて地域について考えることを試みた。	20人
H29/8/18-19	福島県いわき市でのプロトタイプ実践	福島県いわき市チャイルドハウスふくまる研修室	地域のリーダーとなる「ガキ大将」のような人材育成を目的として児童を対象に開催される寺子屋において、リーダーに不可欠な「考える・話す・聞く」能力や技能の育成の一環として哲学対話を行った。将来のファシリテーターの候補となる高専生も参加した。	20人
H29/08/26	哲学カフェ	岩手県立図書館	岩手県立図書館にて哲学カフェを開いた。テーマは先回の最後に決めた「理想の家族」で、当日集まった参加者から募った問いで哲学対話をした。	8名
H29/08/27	第3回子どもてつがく探険隊あ～でもねえこ～でもねえ	山田町ふれあいセンター 四十八坂 八幡宮 山田町立図書館	子ども向けのプログラム「第3回子どもてつがく探険隊あ～でもねえこ～でもねえ」を実施した。午前中は遠野物語の舞台となった四十八坂で遠野物語「狐」の音読を聞いた後、長根勝氏から遠野物語に出てくる明治三陸大津波と東日本大震災の際の大津波についてお話を伺った。午後は、ふれあいセンターにて、その内容を受けて大人と子どもでわかかれて哲学対話を行った。	4名（小学生）
H29/09/06	町おこし協力隊との哲学対話	高知県四万十市役所	四万十市町おこし協力隊・四万十市職員を対象に、地方創生をテーマに哲学カフェを開いた。当日は参加者から挙げられた「移住」に関する問いについて哲学対話を行った。	7名（四万十市町おこし協力隊・四万十市職員）
H29/09/07	哲学対話の授業	四万十市立大用小学校	小学校5・6年生を対象に哲学対話の授業をおこなった。『教えて！哲学者たち 上巻』の一部を教材として、正しさをテーマにした哲学対話を行った。	11名（小学校5・6年生）

H29/09/07	哲学対話の授業	四万十市立川登小学校	小学校2～6年生を対象に哲学対話の授業をおこなった。『なぜあんなに』を教材として、児童と哲学対話を行った。	8名(小学校2～6年生)
H29/9/9	高校生のための哲学対話・文章講座	高千穂高校	高千穂高校の2・3年生対象に、午前中は哲学対話、午後は文章の書き方講座を実施。	高校生 50名、教員 3名、計 53名参加。
H29/9/10	教員のための哲学対話研修	高千穂高校	高千穂地域の高校の教員向けに、哲学対話研修を行った。	教員 9名、他 6名参加。
H29/9/11	哲学対話の授業	広島県竹原市立大乘小学校、呉市豊小学校	小学校を拠点として地域の諸問題を考えるための哲学対話の授業を行った。	20名
H29/9/16	福島県いわき市でのプロトタイプ実践	福島県いわき市薄磯団地集会所	「写すこと、記録すること」をテーマに、小学生、中学生、高専生の多学年を交えた対話を試みた。	10人
H29/09/17	哲学カフェ@ジュンク堂書店	ジュンク堂書店那覇店	ジュンク堂書店那覇店でのイベントの一つとして哲学カフェを開いた。事前に宣伝した「音楽を哲学する」というテーマで哲学対話を行った。	10名
H29/09/18	第4回りゅうPON! てつがくカフェ	琉球新報社	琉球新報の小学生向けの新聞『りゅうPON!』の読者を対象とした哲学カフェを開いた。当日集まった参加者を年齢別に3つのグループに分け、グループごとに参加者から挙げられた問いで哲学対話をした。その模様は『毎日小学生新聞』2017.10.02 8面「なぜ勉強するの? 親子15人参加」、『りゅうPON!』2017.10.01 1面「キラリ★イチオシ てつがくカフェ ゆっくり話して考えよう」、『りゅうPON!』2017.10.01 4・5面「答え出ずとも対話楽しむ」(琉球新報社)に掲載されている。	親子 15人
H29/09/18	哲学対話のすすめかた(初心者向け)	琉球新報社	東京高専の村瀬准教授を講師に招き、哲学対話のファシリテーターを養成する講座を開いた。問いを作る練習やを進行のコツを説明したのち哲学対話の体験講座	11名

			を行った。	
H29/09/19	哲学対話の授業	沖縄市立高原小学校	小学4年生を対象に哲学対話の授業を行った。こちらで事前に考えていた5つの問いから多数決で選んでもらった「ほんとうの友達って何？」という問いで哲学対話を行った。	約120名 (小学4年生4クラス)
H29/09/19	哲学対話の授業	沖縄市立比屋根小学校	小学6年生を対象に哲学対話の授業を行った。こちらで事前に考えていた5つの問いから多数決で選んでもらった「ほんとうの友達って何？」という問いで哲学対話を行った。	約120名 (6年生3クラス)
H29/9/30	哲学カフェ in 妙満寺	京都府妙満寺	地域のコミュニティ・スペースとしての寺院における哲学対話の有効性の検討をした。京都洛北妙満寺における市民のための哲学対話を実施した。	10名(スタッフ2名)

5-1-3. 書籍、DVD など論文以外に発行したもの

5-1-4. ウェブメディア開設・運営

ウェブサイトやSNSアカウント、動画の配信などについて、URL、立ち上げ年月、反響等

- (1) NHK for Education 『Q～こどものための哲学』Eテレ2017年8月14日～8月18日午前9:00～9:15〈全5話〉

*本プロジェクトで用いられている哲学対話の方法を利用したこども教育番組。河野哲也が監修協力し、永井玲衣が出演している。 <http://www.nhk.or.jp/sougou/q/>

- (2) 動画「世界農業遺産 高千穂郷・椎葉山地域 ショートドキュメンタリームービー」* このプロジェクトの枠内で作られた記録映像がきっかけになって作られたもの。製作はNHKエデュケーショナル https://www.youtube.com/watch?v=imY_kXWQenY

5-1-5. 学会以外 (5-3. 参照) のシンポジウムなどでの招へい講演など

5-2. 論文発表

5-2-1. 査読付き (2件)

- (1) Kono, Tetsuya, “Philosophical Practice in Japan” *Practicing Philosophy*. Fatić, Aleksandar and Amir, Lydia (Eds.) Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, 2016, pp.182-202.
- (2) Kono, Tetsuya, “Teaching philosophy and ethics in Japan”, pp.167-169, *History, Theory and Practice of Philosophy for Children: International Perspectives (Routledge Research*

in Education), Edit by Saeed Naji and Rsnani Hashim, Routledge, 2017 April.

5-2-2. 査読なし (5件)

- (1) 河野哲也「子どもの哲学はどういう教育か?」『UTCP Libro Booklet 11 Philosophy for everyone 2013-2015』P4E 研究会編, 2016, pp. 181-183.
- (2) 「こども哲学」が目指す「対話力」とは何か『月刊 教職研修』 2016年9月号, pp. 32-33.
- (3) 河野哲也・得居千照 「子どもの哲学の評価法について：理論的考察と江戸川区立子ども未来館での実践を踏まえた提案」『立教大学教育学科研究年報』第60号 (2017/3), pp. 41-55.
- (4) 福井夏海、『環境教育・地域づくりと連携した新しい図書館を目指して：気仙沼における活動事例①』、St. Paul's Librarian 31号、2017年3月31日、https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=15069&file_id=22&file_no=1
- (5) 小出晋之将・福井夏海、『多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育』報告：気仙沼における活動事例②』、St. Paul's Librarian 31号、2017年3月31日、https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=15070&file_id=22&file_no=1

5-3. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

5-3-1. 招待講演 (国内会議 4件、国際会議 0件)

- (1) シンポジウム提題：河野哲也 (立教大学), 上野行一 (美術による学び研究会代表), 井尻貴子 (立教大学), 山崎正明 (北翔大学美術研究グループ) 「こどものための哲学」と「対話による美術鑑賞」, 美術による学び研究会, 2016年9月17日, 於：北翔大学北方圏学術情報センターPORTO, 札幌.
- (2) ワークショップ：河野哲也 (立教大学), 井尻貴子 (立教大学), 村瀬智之 (東京高等専門学校), 「こどものための哲学」の方法を学ぶ, 美術による学び研究会, 2016年9月18日, 於：北翔大学北方圏学術情報センターPORTO, 札幌.
- (3) ランドテーブル提題：「哲学プラクティスのラディカリズム：小文字の哲学による大文字の哲学の変革」, 教育哲学会第59回大会, ラウンドテーブル2：「いま、なぜ「子どもの哲学」か：哲学的思考の刷新に向けて」, 2016年10月10日, 於：東京大学本郷キャンパス.
- (4) 招待講演：「哲学対話について」東京都校長会の学校改革部会主催講演会, 2016年12月2日：15:00-17:00, 於：文京高校.

5-3-2. 口頭発表 (国内会議 2件、国際会議 0件)

- (1) 公開シンポジウム提題：河野哲也・皆川朋生・秦春杰・廣畑光希・大井稜・宇津山栞・久保木優弥 「気仙地区における多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」『陸前高田グローバルキャンパス：大学シンポジウム 2017』, 2017年1月22日, 於：陸前高田市コミュニティホール.
- (2) 福井夏海 (立教大学 ESD 研究所研究員), 『地域づくりの力となる環境教育をめざして——気仙沼における新しい図書館づくりの実践から——』, 日本環境教育学会、盛岡、2017年9月2日

5-3-3. ポスター発表 (国内会議 0件、国際会議 0件)

5-4. 新聞報道・投稿、受賞など

5-4-1. 新聞報道・投稿

- (1) 『三陸新聞』2016/11/05 朝刊「地域の良さを発見 気仙沼てつがく探検隊」共同通信社記事『産経新聞』、『秋田魁新報』、『中部経済新聞』他、2016/11/28～2016/12/05 連載、朝刊「ニッポンの人づくり：哲学する、世界が変わる」〈1〉～〈7〉
- (2) 宮崎日日新聞 2017/2/11 朝刊「哲学対話 手法学ぶ 結論出さず自由に討論 講師招き高千穂高生ら」
- (3) 『琉球新報』2017/02/23 朝刊「25日に哲学カフェ」
- (4) 『琉球新報』2017/02/24 朝刊「高校生、教授と哲学対話 てつがくカフェ 起業家仲田さん参加」
- (5) 『琉球新報』2017/02/25 朝刊「「うそ」って何？室川小で「てつがくカフェ」」
- (6) 『産経新聞』2017/03/15 朝刊、「立教大学と岩手大、陸前高田に新キャンパス開校へ」
- (7) 沖縄タイムズ 2017/3/25 「東大教授ら招き「哲学対話」 グレイトヴォヤージュが25日に特別講義」
- (8) 『琉球新報』2017/09/09 朝刊 28面（社会）「なぜ友達つくるの？ てつがくカフェ親子で語り合う」
- (9) 『毎日小学生新聞』2017/10/02 8面「なぜ勉強するの？ 親子15人参加」（毎日新聞社）
- (10) 『りゅうPON!』2017/10/01 1面「キラリ★イチオシ てつがくカフェ ゆっくり話して考えよう」（琉球新報社）
- (11) 『りゅうPON!』2017/10/01 4-5面「答え出さずとも対話楽しむ」（琉球新報社）

5-4-2. 受賞

5-4-3. その他（エッセイなど）

- (1) 河野哲也 “子どもと考えよう” 「子どもと向き合う」取材・文：勝部美和子、『クルール(Couleur)』, Vol. 75 (2017/8), p. 3.
- (2) 河野哲也 「子どもは哲学している」『グラフィケーション』11号（電子版2017年8月）.

5-5. 特許出願

5-5-1. 国内出願（0件）

5-5-2. 海外出願（0件）

6. その他（資料：哲学対話の参加者感想）

資料：哲学対話の参加者感想

感想抜粋

【東北被災地での子ども哲学探検隊と岩手県立図書館哲学カフェ】

2016年10月 気仙沼 子どもてつがく探検隊（小中学生）

- ・気仙沼小学校に山椒の木があると知らなかったのでびっくりした。身近にあるもの、感じるものなど、普段考えないことを深く追求することで改めて自分と向き合うことが出来た。
- ・気仙沼の身近にある自然を知れた。
- ・「ある質問についてみんなで話し合って答えを出す」ということは学校では体験できない

2017年3月 気仙沼子どもてつがく探検隊（小中学生）

- ・とても自由な時間。自分が発言したいことを自由に言ってもいい。それがいい。
- ・初対面の人とも前回一緒に活動した人とも活動してたくさんコミュニケーションが取れた。
- ・よりもっと気軽に話せるようにする

2017年4月 岩手県立図書館哲学カフェ（成人）

- ・本当に身近なところで答えの出ない問いについて語り合える場がほしいとつくづく思いました。
- ・色々な年代、色々な考え方や視点が自分にはないものもあって考えさせられました。
- ・哲学対話初めての参加でした。討論とは違うと聞いて気ままに話してしまいましたが、なかなか結論が出ず方向性を決めないことの危うさを感じました。

2017年8月 山田町 子どもてつがく探検隊（小中学生・保護者）

- ・遠野物語とかで本当にあった話とかが一番印象に残った。僕は体験したことや本当にありそうなことを信じています。
- ・3・11のことは語り部さんに代々伝えてもらいたいし、また小中高でも学習の中で取り入れてもらいたいと思いました。（保護者）
- ・今回で子供たちは三回目の参加でした。遠野物語はとても興味深く子供たちと一緒に読みたいと思いました。（保護者）

【沖縄でのプロトタイプ実践】

2017年2月 沖縄 子ども哲学対話（比屋根小・6年生）

- ・今日は哲学カフェをして、とてもいいなと思いました。なぜなら、ひとつのことにたいして、いろいろ深く考えることができ、今日だけじゃなく、いろいろなことにいかすことができ、発想力がひろがると思ったからです。答えがないため、いろいろな発想が浮かんできました。
- ・ひとつのことにたいして、みんなの意見を聞いたけれど、人それぞれ違うから、自分の考えもコロコロ変わっていった。人間はどうしてもウソをつくというけど、みんなの考えから、なんだか違うような気がして、悩んでいた。でもこの悩みが、なんだかおもしろかった。
- ・今日は自分の意見をいうことはできたけど、相手の意見に対して質問をしたり、その意見に対しての自分の考えを言うことはできなかった。だけど、他の人の意見と自分の意見を比べたときに、新しい疑問や意見が出るということは、とても楽しかった。人の意見と自分の意見を組み合わせることで、考えを深めることができ、とてもよい体験となった。

- 学校では急いで考えなければいけないので、じっくり考えることの大切さを学ぶことができた。家族と一緒にやりたい。
- 私はいつもは発表しなかったりするけれど、今日は積極的に発表することができたのでよかった。
- ふだん僕たちは答えのある問題をといて勉強をして暮らしているけれど、今日は無限に続くテーマについて話し合い、とても楽しかったです。
- クラスで人の話をじっくり聞いて、みんなで考えることが少なかったなので、今回みたいなのはとてもよかったと思いました。
- 哲学対話をしてみて、思ったよりたくさんの意見を出すことができてよかった。自分の意見をしっかりとまとめ、話すことはとても大切だと思います。その理由は、18歳になったら政治に参加する権利がもらえるからです。それでもし自分の意見がなかったら、世の中が自分の思ったようにまわらないからです。
- 今日のテーマのように、答えのない問題は世間の中によくあります。だから今日、自分と考えの違う人の話を否定しなかったように、相手の意見も尊重していきたいと思いました。
- いろんな考えをきくことができたし、自分の意見をみんなにきいてもらって、それについての意見も聞けたから、とてもよかった。上手に言えないことがたまにあったけど、途中途中でまとめてくれたりしたから、とてもやりやすかったし、発表をたくさんしようと思うことができた。最後までまとまらなかったけど楽しかった。